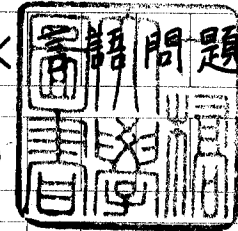


イタリアの〈言語問題〉

(上)



社会学研究科

糟谷塔介

6

橋

大

学



3. フィレンツェ主義の変遷

— マキャヴェッリからクルスカ・アカデミー成立まで 256

第三章 あらたな問題群

1. 18世紀の<言語危機>と啓蒙主義 343

2. 純粋主義と啓蒙古典主義 403

まえがき

なぜわたしたちは、あることばをひとつの  
 <まとまり>としてとらえることができるの  
 だろうか。解剖術に長けた言語学によれば、  
 言語は、さまざまな次元 — 音韻、形態、統  
 辞などなど — の構造から成りたつとされる  
 が、構造とは、本来、要素間の内的依存機能  
 によって成立するものであるかぎり、構造と  
 構造を結びつけひとつの<まとまり>をつく

る関係は、その構造の内部からは生まれてくるはずがない。その関係は、けっきょく、観察者たる言語学者が、所与のく対象<sup>ヲ</sup>として設定しているく<sup>〜</sup>語<sup>ノ</sup>という概念にたよってのみ、存在していると見なすことができる。ここにはひとつの転倒がある。というのは、所与の分析対象の属性のひとつが、分析の結果えられた抽象物の属性のひとつとして、それ自体は検討に付されることもないまま、そのままあてはめられてしまうからだ。そこに

(1) Horálek, Karel, La fonction de la "structure des fonctions" de la langue, in Vachek, J. (ed.), A Prague School Reader in Linguistics, Indiana U.P., 1966, p. 421-425; Bogatyrev, Petr, The Functions of Folk Costume in Moravian Slovakia, Hague, 1971, Chap. 19. 20. げんみつに言えば、く<sup>〜</sup>諸機能<sup>ノ</sup>の構造の機能<sup>ヲ</sup>としなければならぬが、Bogatyrevの英訳にたがって、簡潔なく一般機能<sup>ノ</sup> general function という用語にしておく。構造主義のなかで、このような考察をしめしたのは、かれらだけではないかと思われる。

生まれるのが、く<sup>〜</sup>語<sup>ノ</sup>の物神化である。だから、く<sup>〜</sup>語<sup>ノ</sup>という概念、言いかえれば、ことばをひとつのくまとまり<sup>ノ</sup>にするものを、所与としてではなく、歴史的生産物としてとらえかえすことがどうしても必要になる。この考察に役だつと思われるのが、プラグ学派のホラレック、ボガトゥイリョフの提出したく一般機能<sup>ノ</sup>の概念<sup>(1)</sup>である。それによれば、く一般機能<sup>ノ</sup>は、言語体系の内部でのドミナントな機能とは同一視できず、それと

は独立したレベルで、言語をひとつの自律的  
 統合体としてとらえる機能である。この機能  
 は、言語において〈われわれ〉を強調すると  
 きに、もっとも明瞭にあらわれる。それが、  
 〈母語〉 *langue maternelle* の意識であり、〈純化  
 主義〉 *purisme* の場合であるという。  
 けれども、〈母語〉から〈純化主義〉まで  
 は、無限のへだたりがあるのではないか。  
 それら両者における〈われわれ〉は、また  
 全く異なるものではないか。前者の〈わ

- (1) 内在的現前性は、ブルデューの言う〈habitus〉に位置をしめる。  
 ここでの考察は、次のブルデューの著書にヒントを得た  
 Bourdieu, Pierre, *Le sens pratique*, Paris, 1980  
 とくに chap. 3. *Structures, habitus, pratiques*  
 〈内在的現前性〉 *heccité immanente* という用語は、Deleuze, Gilles & Guattari,  
 Félix, *Mille plateaux*, Paris, 1980 から借りた。

れわれ〉は〈内在的現前性〉として、後者の  
 〈われわれ〉は〈メタ記述〉としてとらえら  
 れるのではなからうか。

内在的現前性とは、意識でも無意識でもな  
 く、実践と身体(1)のなかにきざみこまれた、た  
 えざる生成である。それは、規則にしたがわ  
 ず、意味解釈を必要としない。それらを見い  
 だすのは、外来者の眼をとおすことによっ  
 てのみである。この〈われわれ〉は、固有名詞  
 によって現われる。この〈われわれ〉につい

4) Lotman, Jurij M., Testa e contesto, Bari, 1980 は、文化における〈ナタ記述〉の役割にすぎない考察をしめしている。以下の論は、それに負うところが多い。Lotman は、〈ナタ記述〉に対立するものとして、〈クレオリ化〉をあげる。それは、〈ナタ記述〉によって排除されたものの現実的運動から生まれる。

て、語ることはできるが、それは解釈としてではなく、実践としてである。言い換えれば沈黙のなかにあっても、〈われわれ〉は存在する。

その反対に、〈ナタ記述〉としての〈われわれ〉は、たえず言説化し、解釈をさげなげれば存在しえない。この〈われわれ〉は、それについて語ることによるのみ存在しうる。つまり、〈われわれ〉はこうあるべきだというように。〈ナタ記述〉の本質的な機能

は、単一化、規範化、同質的全体性を付与する理念の構築、そして、そこで異質のものを排除することである。その場合、重要なのは、〈ナタ記述〉がいつまでも〈ナタ〉の位置にとどまらず、それが記述していると呼ぶ現実存在のなかにおりたってきて、ひとつの権威をおびた存在性を帯びることだ。そのとき、規範のなかには位置をしめない現実存在は、正しくないもの、さらには、存在していないものとして、見えなくさせらる。

(1) もちろん、内在的環前性にもとづくくわわわわフによっても、く〜語フは生まれる。しかし、それは、多様なものの運動の場として存在するのであって、規範としてではない。ア・プリオリな区別はできないけれども。

たとえば、奈良時代の大和地方に住んでいたひとびとが、くわわわわフとおなじく日本語フを話していたとするのは、くメタ記述フ以外のなにものでもない。この命題によって保証されるのが、く日本語フなるものの歴史的同一性である。

ふつう、このメタ記述の作用は、制度的自然  
 のなかに埋もれて、<sup>おり</sup>あからさまになることは  
 少ない。つまり、メタ記述の役割は、ある価  
 値にもとづいて対象を設定したうえで、それ  
 を自明化、自然化することだ。実在物にした  
 てあげることである。ある意味で、く〜語フ  
 という概念は、<sup>制度的言説としての</sup>このメタ記述が生産するもの  
 である。く〜語フが存在するから、く〜語フ  
 について語ることもできるわけではない。む  
 しろ、その逆である。このメタ記述をおこな  
 (1)

(1) イワン・イリッチが『シャドウ・ワーク』でく母語フの概念を批判するのは、それが、支配者がさづけろくメタ記述フによるものと考えているからである。もちろん、概念というものは、だれがいかなる状況で用いるかによって意味が変わるものだ。また、どんな概念も、くメタ記述フを本能的にまぬがらざる保証をもちていないのだから、イリッチの議に反論するつもりはないが、用語法としては、ここではイリッチにしたがわない。むしろ、かれの言うくヴァナキエラフが、田中克彦氏の強調するく母語フに近いものである。

うのは、一定の社会集団に同質的意識を付与  
 することを任務とする知識人であり、それによ  
 って、はじめて言語は、さづけられるべき  
 く知識フとなる。  
 (1)  
 しかし、このメタ記述じたいが分裂してい  
 るときどうなるか。それが、イタリアのく言  
 語問題フのしめしている事態なのである。  
 (la questione della lingua)  
 く言語問題フとかっこをつけたのは、それ  
 が、ある歴史的時点に発生し、ほとんど固定

(1) むしろ、言語論争と訳したほうがいいのだが、ここでは言語問題で一貫させておく。

した主題にもとづいて、当事者によって言説  
化された歴史的論争をしめしているからであ  
る。つまり、第三者から見た問題ではなく、

(1)

当事者自身によって意識され語られる問題

である。その主題は、イタリアの言語におけ

る規範はどうあるべきか、その地理的、社会

的、時間的、文体的規準はなにか、そして(

重要な要素として)その名称をなんと呼ぶべ

きか、ということにある。これだけ見るなら

べつにどうということもないように思えるか

もしれないが、イタリアの言語問題の特  
異性は、つぎのことにある。

それが、16世紀から19世紀にいたるまで、

たえまなく続けられた論争であったこと。そ

こでは、複数の視点が拮抗しあい、妥協を許

さぬ明確な立場決定がなされる。つまり、規

範そのものがたえず議論に付されていたわけ

で、安定性を要求するのが規範というものの

性格であるとするれば、このことは、言語規範

の不分明さ、脆弱さをしめしている。ときに



は、ひとつの立場——クルスカ・アカデミー——が他を圧することもあるが、それは、支配領域を極度に限定することによってのみ、可能であった。しかし、同時に、論争を構成するそれぞれの立場は、社会的状況の変化によって意味づけはことなりながらも、言語的観点だけから言うなら、ほとんどおなじ主張をし続ける。つまり、論争性の維持と主題系の連続性が、その特徴である。

さらに、別の面から言うと、ラテン語の支

配から脱して、近代語独自の規範を設定することが、いちはやくく言語問題>において議論の対象となり、定式化されたため、ほかの国々でも現われる論拠や主題の一種のプロトタイプとなっっていることがある。じじつ、いくつかの国では、イタリアのく言語問題>をれじたいが、強い影響力をおよぼした。

しかし、より重要なのは、つぎのことである。イタリアのく言語問題>においては、メタ記述による規範の生産過程が、全面的に露

(1) このような観点をしてはいないが、イタリアの「言語問題」をひとつの基本ケースとして、さまざまな国々での言語規範—とくに「国語」—についての論議とその成立過程を比較検討するところがなされている。とくに、次の二著を参照

Scaglione, Aldo (ed.), *Emergence of National Languages*, Ravenna, 1984

Picchio, Riccardo (cur.), *Studi sulla questione della lingua presso gli slavù*, Roma, 1972

呈しているため — 論争性の強さがこれを余

儀なくさせる — ほかの国々では、無意識

的制度が解消したり、ひとつの支配力が抑圧

しているものでも、ここでは、意識的に語ら

れるということである。その意味で、「言語

問題」は、言語規範の生産と、この普遍的とも

言える現象の、ひとつの準拠枠をつくりうる。

少なくとも、その現象をより明晰に見させて

くれる拡大鏡の役割をはたす。たとえば「  
(1)

言語問題」では、「イタリア語 *lingua italiana*」

という名称、概念さえ、自明のものとしては

あらわれぬ。立場のちがいにあって、「イ

タリア語」のすがた、その歴史は、まったく

ことなるものとなるのである。

たしかに、「言語問題」は、言語的多様性

文化的多元性、政治的統一の欠如など、イタ

リアの特殊性がもたらしたものであるのだが、

そこにとどまらない広い意味を含んでい

ると思われる。この論文は、ほんとうのところ

る、イタリアの個別研究をめぐったものでは

ないのだが、言語問題そのもののすかたをまず明らかにしておかぬばならないので、ほかの国々との比較はあえて避けた。そして言語問題を、イタリアの政治社会状況の連関のもとにとらえることにした。個別性を明らかにすることが、むしろ、問題の広い次元を照らしだしてくれよう。

ただし、ひとつ留保をつけよう。言語問題は、言語知識人によるメタ記述の言説群であるので、その内部においては、上に述べ

たふたつのくわれわれのあいだの相剋。たかいは、あまり前面に出ることがない。ここの言語規範のありかたは、個別言語の全体的表象<sup>とその正当性</sup>をいかに与えるかという理念の次元にとどまっている。しかし、これを逆から見れば、言語問題ほど、言語知識人の多様なすかたをうつしだしてくれものはない。

むしろ、自覚的に、言語問題をく知識人問題としてとらえぬばならない。

論文の内容についてふたっだけふめておく。

ここでは「言語問題」のやま場を、16世紀  
 と19世紀後半にとった。もちろん、ほかの時  
 代が重要でないというのではなく、そのふた  
 つの時期が、「言語問題」の「問題」たるゆ  
 えんを、もっとも明瞭に提示しているからで  
 ある。16世紀を第2章で、19世紀後半を第4  
 章で論じ、第1章、第3章は、それぞれの導  
 入部の役割をはたす。  
 それともうひとつ。「言語問題」において  
 は、いっくに数多くの論者、著書が現れるが、

(1) ムラトリー、バレッティ、フォスコロ、レオバルディ、カッタネオなどを落としたのは、  
 研究不足のためで、それ以外の理由はない。

この論文では、主要な立場を代表しうるもの  
 をとりあげ、それらのテクストの内部分析、  
 (1)  
 というよりテクスト内ではたらく社会的ちか  
 らの分析を行なうことに重点をおいた。マン  
 ゴーニひとりに頁をさきすぎたかもしれない  
 が、それだけの意味はあると思う。しかし、  
 それにしては、間口をひろくとりすぎたかも  
 しれない。個々のテクストの意味を明らかに  
 するとともに全体的連関をも見いだしたいと  
 いう欲求があったため、このような次第とな

(1) Vitale, Maurizio, *La questione della lingua*, Palermo, 1978  
 これは、本文、註釈、アンソロジーをあわせて、800ページの大著であり、  
 <言語問題>の全貌を細部にわたって明らかにしてくれている。  
 しかし、テキストの分析のさいには、ほとんど依拠しなかった。

った。だから、とくにつながりの部分などでは  
 文献資料のアンソロジーや論文引用をたよりに  
 せずにはいられなかったところも多い。と  
 くに、Maurizio Vitaleの大著 *Questione della lin-*  
*gua* は、つねに参照した。この論文が、その  
 (1)  
 縮刷版になっていなければよいのだが。

第一章 <言語問題>の成立まで

ゆいいつの文化言語、書記言語としてのラ  
 テン語が、カトリック教会の権威とむすびつ  
 いて、あらゆる公的言語空間を専有していた  
 中世前期の状況から、断片的にはあるがラ  
 テン語文献のなかに俗語的要素が顔をだしは  
 じめ、しだいに俗語そのもので書かれた文献  
 があらわれて、俗語が文字言語としての地位  
 をかくとくし、ついには中世後期の俗語文学

の開花にいたる過程は、ヨーロッパ言語史・  
 文化史のなかで、もっとも劇的で重要な転機  
 のひとつとして数えられるだろう。もちろん、  
 ラテン語と俗語との地位関係が逆転したとい  
 うにはほど遠く、そのためには、ラテン語に  
 かわる規範言語としての「国語」をつくりあ  
 げようとした近代国民国家の成立を待たねば  
 ならない。また、俗語の舞台登場は、けっし  
 てとっぜんにおこったできごとではなく、数  
 世紀にわたる、ゆっくりとして複雑な変遷を

- (1) Ferguson, Charles A., *Diglossia*, Word 15, 1959  
 (2) Durante, Marcello, *Dal latino all'italiano moderno*, Bologna, 1981  
 p. 90-92

へた長期変動の結果であることも、わすれる  
 べきではない。しかし、こうしたことが、俗  
 語の出現の歴史的意義を弱めるものではない。  
 かつては、ラテン語と俗語とは、社会言語学  
 者ファーガソンが二層言語状態 (*Diglossia*) と  
 よぶものにほぼあてはまる。「書」と「話」  
 公的機能と私的機能とのあいだで、高変種 (  
*High-variant*) と低変種 (*Low-variant*) が、完全な機  
 能分担をおこなっていた状態であったが、こ  
 の安定した二層言語状態がしだいにくずれて

いき、低変種であった俗語が文字にうつされるようになり、範囲に制限があるとはいえ、公的空間にはいりこんでいき、あらたな社会的機能をはくしくしていくという、社会言語学的観点からみて、じつに興味深々たる現象がそこにはある。というのは、それまでは、く書の領域にぞくするとはまったくみとめられていなかった言語が、文字化されるといふことは、言語意識と、それをささえる言語体制の根本的変容なくしては、考えられない

からである。ラテン語と俗語の背後にある社会的ちからの衝突、あつれき、相互干渉を視野におさめながら、この時期のロマンス語圏を総体的に把握する研究は、いまだ充分とはいえない。

たとえば、フランスでは、813年のトゥール公会議でラテン語の説教を俗語に翻訳する (*transferre... in rusticam Romanum linguam*) ことがみとめられるところから、劣った地位にあるとはいえ、俗語がラテン語とはことなる自前の言

(1) Ramat, Paolo, *Adattamenti e traduzioni alle fonti dell'italiano*, in AA.VV. *Italia linguistica: idee, storia, strutture*, Bologna, 1983

語であるとの意識が、社会の上層部にめばえはじめてきたと見なすことができる。なぜなら、翻訳という作業は、多かれ少なかれ、ふたつの言語の独立性と非連続性を認めなくてはできないからだ。<sup>(1)</sup> 842年のストラスブールの宣誓の俗語訳テキストの出現も、そうした言語意識を背景に考えなければならない。このふたつのできごとは、俗語の歴史において画期的なものであるが、俗語の自然成長的發展をそこにみるよりも、前者は、カロリン

(1) Lüdtke, Helmut, *Die Entstehung der romanischen Schriftsprachen*, 1964, rist. in Kontzi, R., *Zur Entstehung der romanischen Sprachen*, Darmstadt, 1978, p. 409.

グ改革におけるキリスト教拡大政策、さらには古典ラテン語復興の意志——なぜなら、ここでは俗語との断絶が要求されるから——と結びつけてとらえねばならないし、後者は、リュトケの考察によれば、国家権力によるあらたな読みあげ言語(Lesesprache)の導入である<sup>(1)</sup>と見なすことができる。だが、それはともあれ、このようにしてラテン語と俗語との二層言語状態は、しだいにくずれていくのである。ところが、イタリアの場合は、少々事情が



ことなる。イタリアでは、ほかのロマンス語  
 地域にくらべて、ラテン語と俗語との安定し  
 た二層言語状態がおそくまで維持される。ト  
 ラール公会議の決定のような、説教の俗語訳  
 の処置は、イタリアではなされない。また、  
 フランスの最初の俗語文献が、おそらくは多  
 数の公衆のまえで読みあげられたであろうス  
 トラスガールの宣誓であるのにたいし、イタ  
 リアの最初の俗語文献は、おそらく9世紀の  
 はじめごろであろうが、ラテン語の祈禱書の

(1) イタリアにおける俗語の到来のくおくわについては。  
 Migliorini, Bruno, Storia della lingua italiana, Firenze, 1960, p. 88-90  
 Devoto, Giacomo, Linguaggio d'Italia, Milano, 1974, p. 218  
 Gensini, Stefano, Elementi di storia linguistica italiana, Bergamo, 1982,  
 p. 112 ff.  
 Durante, M., op. cit., p. 97

なかに、たまたまひっそりと書きつけられた  
 「ヴェローナのなぞなぞ」であり、しかも、  
 9世紀の俗語文献は、いま残っているかぎり  
 これひとつしかないのである。  
 (1)  
 文学言語としての俗語に目をうつすと、さ  
 らに事態は歴然とする。北フランスでは10世  
 紀に武勲詩と物語、南フランスでは11世紀に  
 恋愛叙情詩という俗語文学が興隆の途につい  
 たのにたいし、イタリア俗語文学の出発点は  
 くだって13世紀のシチリア文学とウンブリア

(1) Galasso, Giuseppe, Italia come problema storiografico, Torino, 1979  
p. 58 - 65.

宗教文学に見いださざるをえないのである。

もちろん、フランスの俗語文学の発生をささ

えた。荘園制封建社会は、イタリアでは、一

方では教会の教区支配の強かさ、他方では成

立しつ々あった都市ユムーネの活動によつて

すでに崩壊過程にはいつていたのであるから

単純な比較は無意味である。また、あたら

しい時代の主役となりつ々あった都市ユムー

ネの住民は、文学などよりも、社会的実践活

動に関心を見いだしたということもある。け

れども、つぎのことは、はっきりしている。

イタリア俗語が、文学言語として出発しよう

としていたそのとき、北フランスとプロヴァ

ンスでは、すでにそれぞれの俗語の文学伝統

が成立していたというだけでなく、フランス

語とプロヴァンス語は、文学言語としてイタ

リアでひろく用いられている状態にあったと

いうことである。叙情詩においては、トゥル

バドゥールの決定的影響のもとに、プロヴァ

ンス語による詩作は流行現象となっていたし、

散文においては、フランス語をつかうことが  
 めずらしいことではなかったことは、マルコ  
 ホーロの『東方見聞録』も、ブルネット＝ラ  
 ティーニの『修辞学大全』ともいうべき『宝典』  
 も、フランス語で書かれたことを思いおこせ  
 ば、充分あきらかになるだろう。さらに、北  
 フランスの文化全体の興隆をささえたカペー  
 王朝のような集権的政治権力が存在しなかつ  
 たにせよ、プロヴァンス語は、すでに11世紀  
 以来、南フランスからカタロニアにかけての

(1) Bec, Pierre, La langue occitan, Paris, 1963, p. 67 ff.

超方言的文学語であったが、イタリアには、  
 そうした超地域的言語はいまだ形成されてい  
 なかった。  
 したがって、イタリアでは、ラテン語の伝  
 統的規範性がより強固に維持されていただけ  
 でなく、ほかの俗語文学との競合を意識しな  
 ければならない状況があった。13世紀のジャ  
 ン・ド・マンは、『バラ物語』を書くさいに、  
 俗語をつかうことにたいして、なんら弁明を  
 ひつようとしなかったにちがいない。けれど

も、1世紀後のダンテは、『神曲』執筆にと  
 りかかるまえに、俗語で書くことの正当性を  
 あかしづけなければならなかったのである。  
 もちろん、ダンテ以前に、イタリアの俗語が  
 まったくの沈滞状態にあったというのではな  
 い。シチリア派、ウンブリア派、また、ダン  
 テ自身もぞくしていたフィレンツェの清新体  
 派をはじめとして、各地方には独自の俗語文  
 学が發展していた。さらに、社会的次元でみ  
 ても、13世紀の各地都市國家の發展にともな

い、とくにコムーネの集会を中心として、俗  
 語の公的使用は拡大しつつあったのである。  
 けれども、ある種の伝統にもとづくにせよ、  
 自然的要求にもとづくにせよ、俗語を用いる  
 ことそれ自体と、俗語を用いることにたいし  
 て明確な対自的意識をもつこととは、べつの  
 次元のことである。ダンテの言語思想が生ま  
 れてきた背景には、上にのべたように、イタ  
 リアがある意味で言語的緊張状態にあったこ  
 とを見なければならぬ。

(1) 用いたテキストは、Dante, Convivio, a cura di Piero Cudini, Milano, 1980  
Welliver, Warman (a cura di), Dante in Hell. The De Vulgari Eloquentia.  
Introduction, Text, Translation, Commentary, Ravenna, 1981

## 1. ダンテ — 俗語の〈顕揚〉

ダンテが、俗語の卓越性と、俗語で作品を  
書くことの正当性を、もっぱら主題として論  
じたのは、『饗宴』第一部と『俗語論』にお  
いてである。しかし、しばしば問題となるの  
は、これらふたつの著作のあいだで、俗語と  
ラテン語の価値づけが、まったく逆転してい  
る箇所があるという点である。『饗宴』(I. v.)  
では、ラテン語は、より安定的であり、俗語

では表現できない多くのことを表現でき、と  
りわけ、俗語は慣用 (uso) にしたがうが、ラ  
テン語は技芸 (arte) にしたがうという点で、  
ラテン語は、その高貴さ (nobilita) 有徳さ (vir-  
tu) 美しさ (bellezza) によって、俗語に優越し  
ているとされる。一方、『俗語論』の冒頭で  
は (I. 2~4)、俗語は、あらゆる人間が生まれ  
てはじめて乳母から規則なしに教わる生まれ  
ながらの (naturalis) ことばであるのにたいし、  
ラテン語は、ほんの少数の者が長いあいだの

訓練をかけて覚える二次的で (secundaria) 人為  
 的な (artificialis) ことばであるという理由から、  
 俗語のほうがより高貴である (nobilior est vulgaris)  
 という結論が出されている。

このくいちがいをどうやって解くかに、多  
 くの研究者は頭をなやませしてきた。だいいち  
 ラテン語がよりすぐれているという論を俗語  
 で書き (『饗宴』)、俗語がよりすぐれてい  
 るという論をラテン語で書く (『俗語論』)  
 などとは、いったいどういうことなのかとい

(1) Welliver は、『饗宴』はく喜劇であり、『俗語論』はく悲劇であると言う。

うこともある。それはひとまずおいて、いく  
 つかの解決法のなかでは、『饗宴』のなか  
 ある『俗語論』執筆予定の言反にしたがい、  
 前者から後者へのダンテの言語思想の発展を  
 しるしづけるというのが、もっとも簡便な手  
 段であろう。最近では、それよりも、『饗宴』  
 と『俗語論』という作品の内部形式のちがい  
 を理由にあげる論者もいる。だが、いちおう  
 時間的前後関係はぬきにしてよかるう。むしろ  
 注意すべきは、マンガルドなども指摘す

(1) Mengaldo, Pier Vincenzo, *Linguistica e retorica in Dante*, Pisa, 1978, p. 60. ff.

るように、俗語 / ラテン語の対立が、uso /  
 (1)  
 arte という対立にかさねられるときと、natu-  
 ralis / artificialis という対立にかさねられると  
 きとの、言説の次元の微妙なちがいである。  
 一見すれば矛盾としか見えなないが、『饗宴』  
 と『俗語論』とは、それほどちがったことを  
 言っているわけではない。  
 ラテン語ではなく、俗語を表現媒体として  
 採るというダンテの投企的意志は、両著作を  
 つうじて一貫している。たしかに、『饗宴』

』では、上にのべたように、俗語にたいする  
 ラテン語の優越性が、ひとたびはしめされる  
 のだが、しかし、すぐそのあとで、なぜこの  
 著作が俗語で書かれねばならないかを説くと  
 ころになると、まへのラテン語讚美は、たん  
 (I.X.)  
 に修辞的なものではないかと思えるほどに、  
 ダンテの俗語を支持する意気ごみは、熱っほ  
 いものとなる。『饗宴』は、自作のカンツォ  
 ーネの註釈を目的としていたが、まずダンテ  
 は、俗語の作品についての註釈は、俗語で書

くべきだと言う。だが、これは言ってみれば  
 外面的な理由にすぎない。より重要なのは、  
 つぎのふたつである。  
 ひとつは、ラテン語は少数の者にしか恩恵  
 をあたえないが、俗語の恩恵は、多数の者に  
 およぶことができるという点である。ダンテ  
 は、ラテン語を覚えようとする少数者のうち  
 には、金と地位を手に入れようとするものが  
 ほとんどだと手きびしい批判をおくり、この  
 作品は、「魂の善良さ」「真の高貴さ」をも

つ多数の人間のためのものだと言う。つまり  
 ダンテは、文学作品の生産者として、あらた  
 な社会的価値をにないうる公衆の拡大を望ん  
 だいたのである。  
 そして、もうひとつは、俗語で表現するこ  
 との、ダンテ自身の内発的動機である。それ  
 をダンテは、「自分自身のことばへの生まれ  
 ながらの愛 (lo naturale amore de la propria loquela)」と  
 表わす。俗語は、親からうけつぎ、精神のな  
 かへほかのなによりもはやく入ったゆい、いつ



のものであり、生まれてこのかたそれで善行  
 や会話をおこない、そして、学問の道にはい  
 る導き手になった。その「スイの俗語の偉大  
 さ (la gran bontade del volgare di sū)」をおそらくに  
 するため、俗語の散文で高貴な題材をあつ  
 かい、それがラテン語にいささかも劣らない  
 ことをしめしたいのだ、とダンテは言う。こ  
 うして、『饗宴』第一部の結びでは、俗語が  
 (I. XIII.)  
 「おとろえた太陽が沈もうとするところに昇  
 り来て、かつての太陽が照らしださなかった

暗闇にいるひとびとに光をあたえる、あたらし  
 しい太陽」という、文字どおり輝かしいたと  
 えでもって、称揚されるのである。ダンテは  
 言いたかったのだらう、ラテン語の時代はお  
 めったと。  
 このように、『饗宴』における俗語讃美は、  
 熱烈で直接的な読者へのうったえかけという  
 性格をもっている。これにたいし、『俗語論』  
 は、冷静で緊密な構成をもった理論的著作で  
 あって、ダンテの言語思想のより深化した局

面があらわれている。というのは、『俗語論』

において、ダンテは、ラテン語と俗語の存在

論的本質にまでわけ入って、俗語の正当性を

理論的にときあかそうともくるんだからであ

る。

『饗宴』では、俗語にたいする「生まれな

がらの愛」が説かれたが、俗語そのものの本

質としての〈自然性〉が、『俗語論』におい

て、あかみに出される。すでにのべたよう

に、俗語は、なんの規則にもしたがわず、あ

らゆる人間が乳母からおぼえたままに話す「

自然のことば」であるが、ラテン語は、手本

と訓練をもとに、少数者だけが身につける「

人為のことば」であるから、俗語はより高貴

なものだというのが、『俗語論』の第一のテ

ーゼである。そして、このテーゼにもとづい

て、ダンテは、おもにアリストテレスとトマ

スの哲学にたすけをかりて、言語記号の本質

と言語の起源をめぐる、哲学的神学的議論を

展開していくのである。だから、俗語／ラテ

(1) Mengaldo, op. cit., p. 61

ン語の対立で、前者に価値をおくためにもち  
 いられる naturalis / artificialis という対立は、神  
 学的論拠にもとづいているのである。言語と  
 は、天使と動物のあいだの中間的存在として  
 の人間が、叡知的意味と可感的音声の結合と  
 しての記号によって、その思考を伝達できる  
 ように、神があたえたく自然の光(1)なのであ  
 る。自然 / 人為という対立概念は、時間的に  
 みた発生(1)の順序関係をしめすよりも、超越的  
 視点からの存在本質の規定をしめしている。

ダンテが言語哲学的考察をすすめるさいにも  
 そこで対象となっているのは、あくまで、「  
 自然のことば」である。言わば、ダンテは、  
 「自然のことば」= 俗語を擁護するために、  
 伝統的言語哲学を利用したのである。  
 しかし、ダンテが、俗語の本質としてあげ  
 るのは、(1)自然性(1)だけではない。それにお  
 とらず重要なのは、言語が本質的にもつく多  
 様性(1)である。言語は、時間のうつりかわり  
 によっても、空間のへだたりによっても、お

(1) Apel, Karl Otto, *Idea di lingua nella tradizione dell'umanesimo da Dante a Vico*, Bologna, 1975, p. 143

なじすがたをとりつづけるということはなく、  
たえず、変わりつづけ、多様なありさまをし  
めす。それこそ、「自然のことば」の真のす  
がたである。ダンテは考えた。たしかに、ダ  
ンテは、バベルの塔の聖書解釈にもとづいて  
世界の諸言語の混乱は、神が人間にくだした  
罰であるとの見かたをとっているが、「自然  
のことば」にとって、多様性、変容性が内的  
本質であると言うときには、アーペルが指摘  
するように、そうした教義的解釈は、無効に

なっていると見てよい。じじつ、のちに、『  
神曲』天国篇第26歌末尾では、言語の多様性  
変容性は、それじたい自然の秩序にしたがっ  
ているということが、肯定的にうたわれるま  
でになる。このような言語の歴史的次元の発  
見は、ダンテの言語思想のひとつの核をなす  
ものである。

『俗語論』において、ラテン語は、「人為  
的なことば」とよばれるだけでなく、端的に  
「文法」と同一視されているのだが、ここに

- (1) Apel, K. O., op. cit., p. 146-147
- (2) Lo Piparo, Franco, Dante linguista anti-modista, in AA.VV., Italia linguistica, Bologna, 1983, p. 9-30

いたると、その理由がはっきりにしてくるだろう。中世文化において、ラテン語は、時間と空間の変異におかされな<sup>(1)</sup>い、普遍の秩序を表わす学的制度であったからである。それをさ<sup>(1)</sup>えたのが、学校と教会であったことは、言うまでもない。(『俗語論』における gramatica は文字言語を、gramatice facultas は読み書き能力を指しているという。ロ・ピパロの説は<sup>(2)</sup>かなり説得的であるが、ここでは指摘するにとどめておく。)

けれども、この「自然のことば」の本質的な多様性が、目のまえにあらわれたとき、それは、同時に、「文法」の必要性が生まれてくるときでもあった。なぜなら、移りかわっては消えていく言語の多様性をこえて、「変<sup>(1. IX. 11.)</sup>ゆることの無い同一性」を本質とする「文法」だけが、時間と空間のへだたりをこえた、ひとびととの伝達を、可能にするからである。だから、「俗語」が「文法」より高貴なのはたしかだとしても、それによって、「文法」

が全面的に否定されるわけではない。そればかりか、『俗語論』において重要な論点となっているのは、「文法」が、このような言ってみれば功利的観点から評価されるにとどまらず、むしろ、「文法」＝ラテン語のもつ文化的文学的価値は、けっして否定されることがないということである。だが、この点について述べるまえに、ひとつのまわり道をしてみたい。

『饗宴』のなかで、ダンテは、俗語によっ

て作品を書く理由のひとつに、「自分自身のことばへの愛」があることをあげた。しかし「自分自身のことば」が対立するのは、なにもラテン語にむかっただけではなかった。すでにのべたように、「自分自身のことば」ではないほかの俗語の使用が、<sup>イタリアでは</sup>一般化していたのである。『饗宴』I. XI. 14. において、ダンテは、自分の技倆不足のせいで、ものがうまく言えず、言いわけをするかのように、自分の話しことばを非難しようとする連中を、手き

びしく批判するが、そこでダンテが攻撃して  
 いるのは、ラテン語を偏愛する者ではなく、  
 「イタリアのことばをさげすみ、プロヴァン  
 スのことばをありがたがる (questi fanno vile lo  
 parlare italico e prezioso quello di Provenza)」者たちな  
 のであり、かれらは、古代ローマにおいて、  
 ラテン語を軽蔑し、ギリシャ語を絶賛した者  
 たちに比べらぬのである。そこで、イタリ  
 ア語 / プロヴァンス語の対立に、ラテン語 /  
 ギリシャ語の対立が、かさねあわせぬこと

の意味をせんさくするのはむだかもしれない。  
 ダンテの意図が、「自分自身のことば」を軽  
 蔑し、外来の文化伝統にもとづく言語を讚美  
 する者を、批判することにあつたと言うだけ  
 で足りるかもしれない。しかし、このような  
 比例式をつくり、そこに平行関係を見いだし  
 た意識を、それだけでくみつくせるだろうか。  
 『俗語論』にもどらう。『俗語論』におい  
 て、ロマンス語の言語学的分類がおこなわれ  
 ていることは、よく知られている。ロマンス

語は、肯定をあらわすときに用いる語のうちが  
 いにもとづいて、「オックのことば(lingua oc)」、  
 「オイルのことば(lingua oil)」「スイのことば」  
 (lingua si)」の三つに分類される。ダンテの地  
 理的位置づけによれば、第一のものは、ジェ  
 ノヴァから西の南ヨーロッパ、第二のものは、  
 北フランス、第三のものは、イタリア半島で  
 話されているということだ。それぞれ、プロ  
 ヴァンス語、フランス語、イタリア語に、正  
 確に対応している。ダンテは、これらのこと

ばは、語彙と文法の面で、きわめて似かよっ  
 ているので、同じひとつのことばから生まれ  
 たものと考えてよいと言う。つまり、Romanità  
 の統一性が意識されているわけで、それを、  
 ダンテは、「われわれの三部をなす言語 ydion-  
 ma nostrum tripharium」と言いあらわしたのであ  
 る。(I. X.)

だが、これら三つのことばの統一性をしめ  
 したあとで、ダンテは、それらそれぞれがも  
 つ長所を、比較検討しようとする。「オイル



のことば」は、俗人(vulgaris)のあいだにより  
ひろく普及しており、散文ではどんな題材で  
もあつかうことができること、「オイルのこ  
とば」は、「より完璧で甘美なことば」で叙  
情詩を書いた詩人をもつことに、それぞれす  
ぐれた点があるとされる。そして、これにた  
いし、ダンテが「スイのことば」のすぐれた  
性質を説く理由は、ふたつあるのだが、その  
ひとつは、このことばをつかって、もっとも  
甘美な詩を書いたのが、その土地の者である

(1) 次は、ここはテキストの読みかた自体に問題がある  
quia magis videtur inniti gramatice que comunis est  
下線部のvideturを videntur と読むべきだと、Mengaldo, Grayson は言う。  
もう一つは主語が、「スイのことば」ではなく、「詩人たち」ということになるのである。  
ここでは Welliver の意見にしたがってあく。  
cf. Grayson, Cecil, 'Nobilior est vulgaris': Latin and Vernacular in Dante's  
Thought, in Centenary Essays on Dante, Oxford, 1965, p.62-64.

という。あまり説得力があるとも思えない理  
由である。じじっ、ダンテも、この点をそれ  
ほど強調しているわけではない。ダンテが、  
「ものごとを理性的に見る者には、より重要  
な論拠」とみなすのは、「スイのことば」が、  
「三つのすべてに」共通する文法に、より多  
くささえられている」点なのである。この場  
合、(I.X.2) (1)  
「文法」というのが、ラテン語をさすこ  
とは、あきらかだ。つまり、「スイのことば」  
が、ほかのふたつのことばにたいして、もし

ほころところがあるとするれば、それがラテン語との親近性をもっているということなのである。

たしかに、ダンテは、これら三つのことを比較して、優劣を見わめるといふ論述を、すぐに放棄して、イタリアのさまざまな俗語の分類と記述にとりかかるのだが、そのときでも、「ラティウム（vulgaris latius）」とラテン語との親近性が、つよく意識されていることにかわりはない。というのは、イタリ

(1) たとえば、ポドヴァ人が、名詞の語尾 *-tas* を、縮約してしまうこと (*bonté*)  
また、子音 *u* を *u* に発音すること、*vif* < *vivo* , *nov* < *novem* (I. XIV. 5.)  
「ブレシャ人が」

アの各地方の俗語を記述していきながら、ダンテは、いくつかの方言が、ラテン語にもとづく形態に忠実でないことを、批判している箇所があるくらいなのである。さらに注目すべきは、サルディニア語(1)にたいして、こう言われていることである。「サルディニア人はラテン人ではないが、ラテン人の一員とみなすべきだ。というのは、かれらだけは、みずからの俗語をもたず、猿が人間をまねるように、文法[ラテン語]を模倣しているからだ」  
(I. XI. 7)

(1) 『神曲』地獄篇 第27歌で、ローマ人、グイド・ダ・モンテフェルトロにであった。ダンテとウエルギリウスの場面で、そのまえはギリシャ人ユリシースのほにりたかさを前に、ウエルギリウスが対話をしたが、二んどは君のぼんだと、ウエルギリウスはダンテにこう言う。(※333行)

Parla tu; questi è latino

ローマ人ウエルギリウスがこう言うのである。この latino は、italiano をさす。

ラテン語をもはや「自然のことば」にして  
 いなくとも、イタリアのひとびとは、「ラテ  
 ン人」であることにかわりはない。latino と  
 いう形容詞で、現在なら italiano というべき  
 意味をあらわすことさえできたのである。ラ  
 テン語は、「二次的なことば」であるにせよ  
 イタリアにおいては、ほかの国にない歴史的  
 意味をになつていたのであり、それが latinità  
 の連続性の意識である。そして、『俗語論』  
 が、言わばダンテにおける俗語のく擁護と顕

揚であるのはたしかだが、それはロマンス  
 語圏全域にわたる俗語ということではなく、  
 あくまで、イタリアの俗語。「ラティウム」の  
 俗語」にむかつて、照準がしぼられているこ  
 とを、わすれてはならない。その点を明らか  
 にするためには、もういちど、まわり道がひ  
 つようになる。  
 ダンテが、いちど拒否したかに見えるラテ  
 ン語を、ふたたび視野のなかにとりいれるの  
 は、なにも、イタリアの俗語の權威（つけ）をしよう

というためではない。ここで、『饗宴』にお  
 いて、ラテン語と俗語とにたいして、くださ  
 れた価値評価を思いだしてみよう。そこで、  
 ラテン語が俗語よりすぐれているとされたの  
 は、「俗語は慣用(usu)にしたがうが、ラテン  
 語は技芸(arte)にしたがう」というのが、その  
 理由であった。俗語への肯定的評価のささえ  
 となった naturalis/artificialis の対立が、神学  
 的論拠であったことは、すでにふれたが、そ  
 れにたいして、ここで、ラテン語への肯定的

評価をひき出すために、もちいられる。usu/  
 arte の対立は、修辞学的論拠なのである。つ  
 まり、ダンテにとって、ラテン語が「人為的  
 なことば」であることを確認することは、ラ  
 テン語が、俗語にまさる表現性、文学性をも  
 つことを否定することにはならない。いや、  
 むしろ、俗語の洗練化、崇高化のために、手  
 本としなければならないのが、ラテン語その  
 ものというよりも、ラテン語のもつ技芸(arte)  
 であり、規則性なのである。

[ニニで崇高化(sublimazione)というのは、べつに、あいまいな意味をさすわけではない。ジャンル区分(牧歌、喜劇、悲劇)と、それに対応する文体区分(卑俗体、中庸体、崇高体)の枠組のなかで、もっとも高次のジャンル(悲劇)と文体(崇高体)をあつかいうるような表現形式を<sup>言語に</sup>あたえることが、問題となるのである。そして、illustrazione という概念は、この sublimazione と、ほぼ同義なのである。]ダニテは、『俗語論』第二書第四章で、つ

ぎのように言っている。<sup>という概念</sup>詩を「修辞と音楽によって詩作された創出」とただしく理解すれば、俗語で書いている詩人も、リッパな詩人であることには、かわりがない。しかし、かれらが、ラテン語の偉大な詩人たちとちがうのは、偉大な詩人たちが、規則にしたがったことばと技芸で詩作した(magni sermone et arte regulari poestati sunt)のにたいし、俗語で書く詩人は、行きあたりばったり(vero casu)詩作する点である。だから、偉大な詩人たちを手本に

すればするほど、正しい詩作ができるのである  
 ( quantum illos proximus imitemur, tantum rectius poete-  
 mur) とダンテは言う。ここには、のちにユマ  
 ニストたちが、文学生産の原理にしたてあげ  
 る〈模倣 (imitatio)〉の概念が、すでにあらわれ  
 ていると言うことは、行きすぎになるだろう  
 けれども、ダンテによる、文体の価値基準に  
 は、技芸 (ars) と規則性が、決定的に重要とな  
 る瞬間があるのである。  
 これは文体の問題であって、言語の問題で

はないと言われるかもしれない。けれども、  
 ダンテにとって、言語と文体とは、それほど  
 かんたんに切りはなせるものではなかった。  
 ダンテは、ロマンス語を三つに分けたあと  
 「ラティウムの俗語」だけに話題を限定し、  
 イタリア全土の14のことばを、つぎつぎに記  
 述していく。それは、イタリア方言分類の先  
 駆と言えらるものであるが、ダンテは、客観的  
 な分類と記述を、それじたい目的としたわけ  
 ではない。ダンテが目ざしたのは、「どれほ

ど多くの多様性によって、ラティウムラティウムの俗語  
 が、不調和をきたしているにせよ、もともと  
 優美で光輝光輝なイタリアのことばを狩り出す(

decentiorem atque illustrem Ytalie venemur loquelam)」  
 (I. XI. 1.)

ことなのである。こうして、高次の規則性と  
 表現性をそなえたことばを見つけ出すために  
 イタリアの各地方のことばが、俎上俎上にのせら  
 れ、検討されていく。ところが、その探求の  
 結果、ダンテは、みずからの要求をみたすよ  
 うなことばは、ひとつも存在しないと認める

ことになるのである。(そのなかでは、もっ  
 とも好意的な評価があたえられるのは、フィ  
 レンツェ語ではなく、ボローニャ語である。)

ここで、ダンテが提出するのが、く光輝な  
 俗語(volgare illustre)の概念である。これにつ  
 いてのダンテの説明は、つぎのようなものだ。  
 数における1、色における白、全存在物にお  
 ける神のように、すべての個物のなかに遍在  
 するが、その特定のどれにも局在しない単純  
 実体、理念的一者を、イタリアの俗語のなか

にもとめたときに、えられるのがく光輝な俗語である。つまり、イタリアの各地方のこのばのなかに、あまねく存在するが、どのこのばとも同一ではなく、すべてのイタリアの俗語の属性の基準となるような俗語、それがく光輝な俗語である。(I. xvi.)

このく光輝な俗語という概念は、こののちのイタリアのく言語問題において、じつにさまざまな解釈がなされ、さらに、ひとつの立場決定をせまるような論点をも提供する

ことになるのである。この点は、のちのち論ずることにするが、たしかに、ダンテの言いかたには、あいまいなところがある。いったい、く光輝な俗語は、純粹な理念型にすぎないのか、それとも、現実に存在する実在物なのか。また、それは、文体の次元でのひとつの様式をさしているのか、それとも、言語そのものの次元での、イタリアの共通語のようなものをさしているのか。なるほど、く光輝な俗語は、悲劇やカンツォーネのような



ジャンル、崇高体がもとめられる様式において用いられる言語であること、いままでそれを用いてきたのが、すぐれた文学者たち (doctores illustres) であることは、ダンテによって語られている。けれども、やはり、く光輝な俗語 の概念は、文学の表現形式の枠組のなかには、おさまりきれないものをふくんでいるのも事実である。言わば、それは、言語と文体、理念と現実との分離と統合を、同時に可能にさせるような、ひとつの結節点なのであ

る。そこで重要なのは、ダンテのく光輝な俗語 という概念には、あからさまではないにせよ、ある政治的意志がふくまれているといふことである。

ダンテは、く光輝な俗語 (volgare illustre) に、さらに三つの形容辞 *cardinale*, *aulicum*, *curiale* をかさねているが、そのそれぞれについて、こう説明する。くillustre は、文字どおり、光りかがやくという意味で、「教養と権威によって高められ、それを使う者を名譽と栄光で

高める」俗語だからである。〈cardinale〉とい  
 (I. xvii.)  
 うのは、ちようつがい (cardo) のように、すべ  
 てのほかのことばが、そのまわりをまわりつ  
 つも、その動きを規制する不動点をさすから  
 である。〈aulico〉というのは、「もしイタリ  
 アが王の宮廷をもっていたなら、その俗語は  
 宮殿にあるはず」だからである。宮廷は、全  
 王国の共通の家であり、崇高な支配者である  
 から、〈光輝な俗語〉は、そこで話されるの  
 がふさわしい。最後に、〈curiale〉というのは、

ちようど、法廷 (curia) が、なすべきおこない  
 のよく測られた規測 (librata regula) をあたえる  
 のと同じはたらきを、それがほかのことばに  
 たいして果たすからである。(I. xviii.)  
 宮廷的、法廷的という形容がなされていて  
 も、文字どおりそこで話されるべき言語のこ  
 とをさしているというよりも、むしろ、比喻  
 的価値づけがおこなわれていると見たほうが  
 いいだろう。というのは、ダンテ自身もみと  
 めているとおり、イタリアを統一的に支配す

る宮廷も法廷も存在しないからだ。「王の宮  
 殿がわたしたちには欠けているから、わたし  
 たちの光輝な俗語は、異邦人のようにさまよ  
 い歩き、つつましいいかくれ家に身をひそめて  
 いる」のであり、「イタリアには、ドイツ王  
 (I. XVIII. 2.)  
 の法廷のように、統一したと呼ぶうる法廷が  
 ないとはいえ、その成員は、欠けてはいない。  
 ちようど、ひとりの君主によって結がついて  
 いる成員のように、この成員は、理性のめぐ  
 みぶかい光によって、結がつけられている」  
 (I. XVIII. 5.)

のである。  
 当時イタリアは、教皇派(グェルフィ)と  
 皇帝派(ギベリニ)というふたつの政治的  
 党派性を軸に、都市国家の内部でも、それら  
 相互でも、抗争がたえまなく、さらに、ふた  
 つの党派のうしろだてであるフランスとドイ  
 ツの干渉、侵入は、日常茶飯事であった。ダ  
 ンテ自身、教皇ボニファティウス八世の要請  
 にこたえてフィレンツェに侵入したフランス  
 軍の介入による政変によって、フィレンツェ

(1) デ・サンクティス 『イタリア文学史』 I. 中世篇. 現代思潮社. 1970. p. 203-204.

から追放されたのであり、『饗宴』と『俗語論』は、亡命生活のさなかに最初に執筆した著作なのである。デ・サンクティスは、く光輝な俗語ヲを、地方的要素を排除して形成される文学的統一語ととらえ、『俗語論』を『帝政論』の言語版と見ているほどであるが、<sup>(1)</sup> そのような党派性の単純な反映を、作品のなかにもとめるのは、無益なくゆだてである。むしろ、こう言ったほうがいいだろう。『俗語論』を支配しているのは、く亡命ヲのト一

(1) Mengaldo, P. V., op. cit. p. 85

(2) この点からすれば、Welliverが、『俗語論』をく悲劇>としてとらえる見方は、納得のいくものとなる。

んなのであると。『俗語論』の作者くダンテ><sup>(1)</sup> は、理想とかかげなく光輝な俗語ヲをもとめて、イタリア中をたずねあらくが、そのこころみもむなしく、ついに、く光輝な俗語ヲは、理性の光によつてのみ結がつけられて、異邦人のようにさまよい歩いていゝことを、確認するにいたる。<sup>(2)</sup> たしかに、く光輝な俗語ヲは、文体の一樣式でもありうる。しかし、く光輝な俗語ヲこそ、ラティウムラティウムの俗語そのものであること(

dicimus esse illud quod vulgare latium appellatur) . そして、「イタリア全体に属するものは、ラティウムの俗語とよばれる ( quod totius Italiae est, latium vulgari vocatur )」ことが言明されるとき、それが、文体の次元だけにとどまるものでないことも明らかだ。〈光輝な俗語〉の概念を提出することは、『俗語論』における、ダンテの究極目的だったのであるが、それによってダンテは、「ラティウムの俗語」の同一性をあかしづけると同時に、文学的実践の指針を

あたえようとしたのである。それは、はなはだしい政治的、社会的分裂の状況のなかで、それらを超えた次元で、イタリアの言語的、文学的共通性の理念をうちたてようとするところみであった。

ダンテの『俗語論』は、げんみつにいえば、歴史的論争としての〈言語問題〉の枠組のなかにはははいらず、むしろ、その前史としてあるものである。けれども、『俗語論』には、

<言語問題>を構成することになる重要な論

点が、すでに充分にあらわれている。

第一は、俗語とラテン語との対抗関係であ

る。ここでは、俗語の使用領域の拡大にとも

なあって、俗語の価値づけ、正当性付与を、い

かにしておこなうかが、問題となる。ただし、

俗語対ラテン語のこのあるそいは、16世紀な

かばまでには、ほぼ決着がつき、<言語問題>

においては、副次的な役割しか、はたさない

のである。

第二は、俗語の正当性が確認されたうえで、

そのあまりに多様な俗語の規範を、どこにも

とめるべきかという問題である。これこそ、

<言語問題>の中心的主題をつくる。地方主

義(municipalismo)の伝統が強いイタリアでは、

超地域的言語の形成のためには、言語にたい

する明確な反省的意識が、どうしてもひつよ

うになる。ダンテの<光輝な俗語>は、そこ

から生まれたひとつの解答であった。ただし、

注意すべきは、言わゆる方言は、けっして都

市文化に対立する要素ではなく、地方のそれぞれの都市——ここにはフィレンツェもふくまれる——の文化伝統に、強固にむすびついていっていることである。さらに、ここに、俗語自体の文化伝統が形成されるにしたがい、時間軸（過去／現在）からみた規範設定の問題が、からまりあって、複雑な様相を呈することになる。ただし、これらの問題は、19世紀まで、はっきり言えばマンゾーニ主義の出現までは、文学語、文化言語における規範の

ことだけに限られていた。

第三に、理念的、あるいは文学的ともいえるくイタリアの観念は、存在した一方で、政治的統一は19世紀のリソルジメントまで、おこなわれなかったし、その客観的可能性もほとんど存在しなかったことがある。ここに、逆説的な意味での、〈言語問題〉の政治性がある。政治的、社会的主題が、〈言語問題〉のなかに、直接あらわれてくるのは、18世紀からではあるのだが、それ以前でも、政治社

会の脆弱な基盤のなかで、知識人が、言語のヘゲモニーをいかに形成し、獲得するかという課題は、く言語問題の社会的コンテクストとなっているのである。

最後に、『俗語論』について、ふれておきたいのは、この著作がたどった、奇妙な運命のことである。ダンテの生涯と作品を、みじかくはあがあるが、はじめて包括的に記述した、ヴァーニの『年代記』には、『俗語論』の

ことが、ちゃんと述べられているのだが、その名声は、ほかの著作より、はなはだ劣ったものだった。『俗語論』は、フィレンツェでよりも、北イタリアで流布したが、そこにはすでに、ダンテの俗語の顕揚に敵対的なあいどをとるユマニズム文化が、発展しつつあった。そして、14世紀には、とにかくも三つの写本があったにせよ(ただし、フィレンツェのものは、ひとつもない)、15世紀には、写本も、ましてや、出版もおこなわれず、『俗



(1) Mengaldo. P. V., op. cit., p. 22-26

『俗語論』は、ほとんどわすれさられたかっこうになる。しかし、16世紀はじめに、トリッシーノ<sup>(1)</sup>が、パドヴァで写本を発見し、みずからのイタリア語訳ともども出版したとき、『俗語論』は、あらたな運命にであうことになる。というのは、この『俗語論』の発見が、く言語問題へのひとつの火つけ役となり、ダンテ自身の意図をはなれて、論争のなかでの論者のたちばにされたがって、さまざまな解釈もつけられることになるからである。そして、『俗語

論』の解釈問題は、19世紀のペルティカリヤマンゾーニにいたるまで、く言語問題へのひとつのたて糸をつくるのである。だが、これは、おいおい、述べていくことにする。

## 2. 俗語とラテン語 — 15世紀における

1300年代における、俗語の台頭は、ダンテ

ペトラルカ、ボッカッチョのいわゆるく三冠

(Tre Corone) を筆頭とする、トスカナ俗語文

学の確立によって、説明されることが多いけ

れども、それは、数ある要因のうちの一つ

にすぎない。それは、文学語としてのトスカ

ナ語が、叙情詩と物語のジャンルにかぎって

優越権をもったというにすぎず、社会的にみ

れば、むしろ、1300年代に大きく成長した。

フィレンツェ商人の活動のほうに、決定的役

割をはたした。商業活動の拡大とともに、必

然的に要求される読み書き能力をかくとくし

たかれらは、しだいに俗語による実用散文を

発展させるにいたり、同業組合規約などを、

俗語で起草するようになる。さらに、そうし

たなかから、商人文学と呼ばれるものが、生

まれでてくるのである。しかし、このような

俗語の台頭は、なにも、フィレンツェだけに

かぎったことではない。各地の都市国家にお  
いても、俗語の公的使用は、しだいにひろが  
っていった。都市規約などの法令類は、1300  
年代前半には、ラテン語の本文に、俗語の翻  
訳が付されるようになり、後半には、俗語そ  
のもので起草するのが、一般的傾向であつた。  
だから、俗語の勢力拡大に寄与したものとし  
て、各都市の書記局(cancelleria)の活動は、け  
っして見のがすことのできない重要性を、も  
っているのである。ただし、この場合、用い

られるのは、もちろんのこと、その地方ごと  
の俗語であつて、<sup>外交文書などの</sup>一方、都市相互の交流には、  
いぜんとしてラテン語が、用いられていた。  
このような俗語の台頭にたいして、15世紀  
にはいり、停止信号をかけたのが、古典語の  
復興をのぞんだユマニスム文化であつたとい  
うのは、これまたよく言われるところである。  
たしかに、初期ユマニストのうちに、俗語を  
さげすみ、権威あるラテン語をかたくなに守  
ろうとした者が多かつたのは、事実である。

(1) エウジェニオ・ガレンロイリアのヒューマニズム 創文社、1960。が特に参考になる。

しかし、事態はそれほど単純であつたわけではない。

ユマニズムが、倒すべき最大の敵と見なし

たのは、壮大な普遍学的体系性をそなえ、形

而上学と神学で硬直化したスコラ哲学であつ

た。思考に、あらかじめ設定された論題(ト

ポス)があてがわれ、三段論法があてはめら

れると、思考は、すっかり生きた具体性を、

うしなつてしまふかに思われした。このスコラ

哲学の体系性、抽象性を批判するために、ユ

マニズムのとつた武器が、文献学的歴史研究

なのである。ユマニストが、古典テクストの

厳密な校訂をおこない、その正確な意味を理

解するため、文献学、歴史学の知識を総動

員させたのは、その著作には、それが書かれ

た時代の相が刻印されているという把握があ

つたからである。アリストテレスは、もはや

永遠の真理を告げる無謬の權威としてではな

く、紀元前四世紀のアテナイに生きた、ひと

りの思想家のすがたをとる。古典を、その時

代にあったがままに復原しようとする意志は、もちろん、一種のドグマティズムに墮する危険に、つねにさらされていたのだが、その一方で、思想の歴史性の自覚にもささえられていた。その思想の歴史性の把握に達するため、の導き手が、言語であった。論理学と弁証論にささえられたのが、スコラ哲学であったとすれば、ユマニスムは、言語のなかに、人間を理解するための鍵を見いだした。文法は、精神の鏡として把握され、修辞学の目的であ

(1) ハノフスキーは、これらふたつのできごと——古典への距離をもったまなざしと遠近法の發明——を、むすびつけてさえている。  
ハノフスキー『ルネサンスの春』思索社、1973、p.127

ったく雄弁 (eloquentia) は、倫理学的価値でもあった。そして、思想の歴史性をささえる言語が、それじたい、歴史的次元のなかにおかれたとき、それは、俗語といえども、ラテン語に劣らない歴史的発展の可能性を蔵していることが、理解されることにもなる。

こうして、ユマニスムにあっては、古典はつねに、歴史的パースペクティヴ——まさにパースペクティヴ——  
遠近法は、ルネサンスの一大発見であった——  
のなかにおかれ、現在とは距離をもったも

のとしてあらわれる。だから、ユマニストが  
 キケロの時代のラテン語を、その時代に理解  
 されたのと同じかたちで復興しようとしたと  
 き、そこではじめて、古典は模範的性格をお  
 び、模倣(imitatio)という考えかたが、生まれ  
 てくるのだが、一方で、それは、ラテン語を  
 純粋に過去の産物とみなし、古典性のなかに  
 おしとどめておくことである。中世において  
 ラテン語は、さまざまな現実的要求と接触し  
 ており、それだからこそ、ユマニストは、中

- (1) フィリップ・アリエス『く教育の誕生』新評論、1983、p.167-168  
 エウジェニオ・ガレン『ヨーロッパの教育』サイマル出版、1974、日本語版序、p.2.

世ラテン語を、墮落したものとて告発した  
 のだが、いまや、古典時代のラテン語が復活  
 し、さらに、文学、哲学などの高次のジャン  
 ルにおいてのみ用いるべきものとなったとき  
 ラテン語は、死んだのである。  
 (1)  
 このように、ユマニズムは、ラテン語と俗  
 語の対抗関係のなかで、複雑な役割をはたし  
 たが、ここでは、積極的な俗語支持にかたむ  
 いた一潮流について、ふれておこう。それは  
 14世紀末から15世紀前半にかけて、フィレン

- (1) Baron, Hans, *The Crisis of the Early Italian Renaissance*, Princeton, 1966. 特には Part 4, *Classicism and the trecento tradition*, p. 273-353.
- (2) サルターティについては、ガレン『イタリアのヒューマニズム』 p. 27- p. 34. 同著者『イタリア・ルネサンスにおける市民生活と科学・魔術』岩波書店、1975. p. 1~39. がくわい。

ツェで発展した。市民ユマニスムである。

(1)

この市民ユマニスムのありかたを、典型的

にあらわしているのは、当時のフィレンツェ

共和国書記官長、コルツチョ・サルターティ

の思想である。サルターティは、晩年のペト

(2)

ラルカと親交をもち、古典文化にたいして、

深い造詣をもっていたユマニストであるが、

その一方、公職にあつては、無数の私的、公

的書翰をつうじて、敏腕な外交手腕を發揮し

た政治家でもあつた。かれは、現実からのが

れて、孤高の観想生活をおくるような知識人

の態度を、きびしく批判した。人間の天職は

この地上にあるのだから、社会のなかで世俗

の生を生き、市民としての義務をはたすこと

が、知識人のつとめであるとされたのである。

ガレンが言うように、そこでは、政治活動と

思想活動が、なんの矛盾もなく、統一されて

いた。このように、実践性、世俗性をおもん

びる思想的立場から、俗語支持の主張が生ま

れてくるのは、ある意味で、自然なことであ

るう。

さらに、政治的状況のこともある。フィレンツェは、当時、ミラノのヴィスコンティ家と敵対関係にあったが、そのなかで、ミラノは専制主義者カエサルに、フィレンツェは共和主義者キケロにたとえられ、フィレンツェは、ローマ共和制の伝統を正當にひきつぐ自由の都市であるとの把握がなされ、祖国 (patria) の意識が、高揚していった。そして、これにむすびついて、祖国フィレンツェの栄光

(1) Baron, H., op. cit. p. 339-342 がくわしい

のしるしとして、ダンテ、ペトラルカ、ボツカッチョのく三冠フがたたえられ、フィレンツェ語の卓越性が、うたわれることにもなるのである。

このような精神的風景を背後にもち、俗語支持を明確にしたのが、レオナルド・ブルーニである。ブルーニの俗語にたいする態度は、1435年にフィレンツェでおこなわれた、俗語の起源についての論争のなかで、はっきりとあらわ~~さ~~れられている。俗語は、ローマ帝国に壘

(1)



族が侵入したことが原因でできた、くずれた  
 ラテン語から生まれたものだという、当時ひ  
 るく支持された考えかたにたいして、ブルー  
 ニは異を唱え、ローマには、キケロの時代か  
 らすでに文学語とはことなる民衆語が存在し  
 ており、それが、現在の俗語のみなもとであ  
 ると主張した。その民衆語は、文学ラテン語  
 のような洗練された形式をもっていなかった  
 とはいえ、すべてのローマ人が、乳母からは  
 じめて学び、固有の純粋さ、民衆的優美さを

をなえたことばであったとブルーニは言う。  
 ブルーニの把握が正しいかどうかは、さほど  
 問題ではない。ブルーニの目には、ローマか  
 らフィレンツェへの共和制の伝統の継承とい  
 う政治的主題が、だぶって見えていたことは  
 たしかだけれども、言語の起源についての言  
 説は、多かれ少なかれ、必然的に、ある種の  
 イデオロギー一性を宿してしまうものなのであ  
 る。この点からすれば、ブルーニが反対する  
 蛮族の侵入に俗語の発生の原因を見るという

把握は、より以上に、イデオロギー的である  
う。ここで重要なのは、俗語が、けっしてラ  
テン語の墜落したすがたをしめすのではなく  
ローマ時代にまでさかのぼる伝統をもち、独  
自の価値をあらわすことばとして、とらえら  
れたことなのである。さらに、ブルニーは、  
『ダンテ伝』(1436)において、こう言うまで  
になる。人を詩人たらしめるのは、どの言語  
を用いるかによるのではなく、その詩人自身  
の力量によるのだから。「ラテン語で書くか

(1) Vitale, Maurizio, La questione della lingua, Palermo, 1978<sup>2</sup>, p. 24

俗語で書くかというのは、たいした問題では  
ない。それは、ギリシャ語で書くかラテン語  
で書くかということと、なんらちがいはない。  
それぞれの言語は、それ自身の完璧さ、響き、  
洗練されて学問的な話しかたをもっている」  
(傍点引用者)<sup>(1)</sup>  
と。こうして、俗語は、ギリシャ語、ラテン  
語と対等にならびうるような、独自性をもつ  
ことばとなるのである。

俗語はローマの民衆語に起源をもつという  
ブルニー説は、それほどうけいれられたわけ

ではない。しかし、そうした起源の問題とはなれて、俗語とラテン語は、それぞれ独立したことばであり、その点では、まったく対等な関係にたつという把握は、しだいに支持されていくようになる。たとえば、15世紀のく

万能の天才>、レオン・バツティスタ・アルベルティは、ブルーニの起源説を批判しながらも、俗語を支持することには、ためらわなかった。アルベルティは、『家庭論』(1437)において、古代の作家たちは、その時代の多

(1) Vitale, M., op. cit., p. 24, p. 627.

教のひとびとにわかるように、書いたのだから、わたしたちも、現在に生きているひとびとにわかるように、書いてはいけないうけがあるだろうか、と問いかける。そして、ラテン語が、豊かで洗練されたことばであるのは事実だが、それはもともとそうなのではなく、作家たちのたえまない努力によるものであるのだから、わたしたちもそれにならえば、俗語を、ラテン語に比肩しうるすぐれたことばにすることができると言う。じじつ、

(1)

アルベルティは、俗語も、ラテン語に劣らぬ規則性をもつことばであることを、立証するために、最初の俗語文法『フィレンツェ語諸規則』を著わすのである。

こうして、しだいに、俗語を支持する論者たちは、俗語とラテン語の発展の平行性を強調する視点に、立つようになってくる。これは、ダンテには、まったく見られなかった把握のしかたである。もちろん、フィレンツェの繁栄は、かつてのローマにも比べられるも

のだといったような自負心が、この視点をさえたということもあるだろう。ただ、ここに注意すべきことがある。見てきたことからわかるように、俗語の正当性を主張することとは、すぐさま、ラテン語の価値を否定することにはつながらないのである。そして、俗語とラテン語の発展の平行性、さらには、俗語によるラテン語の継承が説かれるようになると、ラテン語のもつとされる卓越的価値が、むしろ、俗語の向上化、洗練化のモデルとな

るのである。

さらに、ユマニストの立場も、しだいに変質しつつあった。多くの都市国家が、その道

をたどったように、フィレンツェもまた、そ

の政治体制を、コムーネ制から領主制へと変

化させていった。ここに登場するのが、メディ

チ家であり、領主 (signoria) を公然とは名の

らなかつたとはいえ、メディチ家は、フィレ

ンツェの政治経済の全権を、手の内におさめ

るにいたる。そして、コジモから大ロレンツ

オへの文芸保護政策 (mecenarismo) は、フィレン

ツェの文化的威光を高めたが、集められた文

人たちは、市民生活とかけはなれた宮廷とい

う別天地に活動の場を見いだすようになる。

そこから生まれだた代表的な思想が、新プラ

トン主義とキリスト教を結合させた、フィチ

ーノの神秘主義的くプラトン神学であった

わけである。

こうしたなかで、俗語がどのような地位に

あったかを、明らかにするには、クリストフ

オロ・ランディエーノの俗語観を見るのがよい  
 だろう。ランディエーノは、親友のフィチーノ  
 とともに、メディチ家が保護していたプラト  
 ン・アカデミーで教鞭をとっていたが、ラン  
 ディエーノによれば、知識人の理想のすがたは、  
 市民生活にはいっさいかかわりをもたない観  
 想生活のなかで、世界の永遠の本質について  
 思索をかさねることであり、そうであるから  
 こそ、万人が耳を傾けるべき至高の知者とな  
 るのだ、ということである。ガリンは、こう

(1) ガレンロイタリアのヒューマニズム p. 90.

したランディエーノの思想によって、「知識と  
 活動とを統一しようとした初期ユマニズムの  
 努力は、こうして行為と瞑想との新しい乖離  
 によって無に帰してしまった」<sup>(1)</sup>と言っている。  
 ところが、一見予想されるのはちがって  
 この思想的立場から、ラテン語を称揚し、俗  
 語を蔑視する態度は、生まれてこなかったの  
 である。「ラテン語の完璧な知識をもたなけ  
 れば、われわれの言語で雄弁にはなれない」  
 「良きトスカナ人であるうとする者は、ラテ

(1) Vitale, M., op. cit. p. 25.

(2) Apel, K. O., op. cit., p. 171.

ン人でなければならぬ」というランディエ  
(1)  
 のことばは、そうした態度をしめしている  
 のではない。そこで目ざされているのは、ラ  
 テン語の語彙の〈富〉を俗語のなかに同化し  
 て、俗語の高揚をはかるといふことなのであ  
 る。アペルによれば、〈高尚化 (illustrazione)〉  
 とくことばの富 (copia verborum) は、ユマニス  
 ム言語観をささえるふたつのトポスなのであ  
 るが、それが、いまや、俗語の圏内に適用さ  
(2)  
 れるようになったのだ。俗語とラテン語は、

かつてのような敵対関係ではなく、むしろ、  
 競合と継承の関係に、おかれるようになる。  
 古代ローマ人が、ギリシャ語の教養をつむこ  
 とで、ラテン語を豊かにしていったように、  
 ラテン語の教養をつみ、そこから、みずから  
 の富となるものをひきだしてくることで、俗  
 語をさらに発展させることができる、と考  
 られたのである。この立場から、ランディエ  
 ノは、プリニウスの『博物誌』を、俗語に翻  
 訳したのである。15世紀前半には、ユマニス

(1) Dionisotti, Carlo. Geografia e storia della letteratura italiana, Torino, 1967, 1971, p. 150-151.

トは、けっして、ラテン語の古典を、俗語に  
 翻訳などしなかったこと、さらに、この作品  
 の性格上、多くの自然科学的専門用語が、俗  
 語にうつされたことを思えば、それは、画期  
 的なできごとであった。<sup>(1)</sup>

その一方で、文学伝統を背景として、トス  
 カナ語の優秀性が強調されてくるのも、この  
 ころである。みずから文人でもあったロレン  
 ツォ・デ・メディチは、俗語を用いて作品を  
 書いた理由を問われて、ギリシャ語も、ラテ

(1) Vitale, M., op. cit., p. 26.  
 Grayson, Cecil. Lorenzo, Machiavelli and the Italian Language,  
 in Italian Renaissance Studies, London, 1960, p. 410-432.

ン語も、当時のひとびとにとっては、「生ま  
 れながらの母語 (lingue maternelle e naturale)」であっ  
 たのだと答え、トスカナ俗語は、14世紀の文  
 学者たちの手で、十分な豊かさと気品をかく  
 とくして、言語の青春期にいるのだから、さ  
 らにいっそうの仕上げをほどかせば、たやす  
 く成年期に達しうるだろうと言う。ラテン語  
 にたいする階層関係は、いまだたもたぬてい  
 たとはいえ、このような楽天的とも言える、  
 俗語の有機的成長への確信が述べられたこと



は、この時期に特徴的なことである。こうした言語観を背景にして、フィレンツェは、ドロレンツォのメディチ家周辺の作家を中心に、いままでにならぬほどの俗語文学の興隆を見る。その影響は各地の宮廷におよび、それぞれの土地で、宮廷俗語文学が発展する。

けれども、15世紀後半には、俗語の統一規範は、いまだ存在していなかった。ペトルカとボッカッチョは、たしかにもっともよく読まれていた作家ではあるのだが、それは

(1) Grayson, C., op. cit., p. 420

(2) Stussi, A., *Lingua, dialetto e letteratura*, in *Storia d'Italia*, vol. 1, p. 694.

それだけのことで、かれらが、言語と文体の普遍的模範であるわけではなかった。注目すべきなのは、同時代の言語慣用と過去の文学語とのあいだに、なんら境界が設定されず、一種の言語的文体的折衷主義が生まれたということである。フィレンツェ俗語文学の代表者ホリツィアーノの言語は、形態音韻的には当時の慣用にしたがう一方で、語彙の面ではラテン語や清新体派の言語を、おちばにとり入れていくことが指摘されている。このよ

(2)

うな混質性の許容は、方言にたいしたときも同じであった。各地の宮廷の俗語文学では、トスカナ語とその土地の方言をまぜ合わせることは、逸脱現象をけっして示すものではなく、むしろ、きわめて正当的なやりかたであった。ぎゃくに、フィレンツェでは、イタリア各地の多様なことばへの興味が、作家たちのあいだで、分かちもたれており、ルイジ・ポルチなどは、みずから、ナポリ語やミラノ語によるソネットを、ものしたほどだった。

- (1) Segre, Cesare, *Lingua, stile e società*, Milano, 1963 に所収の  
 つぎの2論文を参照。  
*Edonismo linguistico nel Cinquecento*, p. 369-396.  
*Polemica linguistica ed espressionismo dialettale nella letteratura italiana*,  
 p. 397-426.

さらに、ウェルギリウスやオウィディウスに  
 発想の範をもとめた。田園詩や恋愛詩におい  
 ては、登場人物にあわせて、きわめて方言的  
 民衆的な語彙と文体があらわれ、職業的隠語  
 が用いられることさえ、まれではなかった。  
 それは、時には風刺に、時には意識的パロディ  
 ーにかたむくものであったが、こうした現  
 象の背後にあったのは、セグレがく言語的快  
 楽主義 (*edonismo linguistico*) と名づけたような言  
 語意識である。厳格な教義にささえられた、

文学語の統一的規範が存在しない状況で、作  
 者の趣味と主題にあわせて、高尚なものから  
 卑俗なものにいたるまで、それこそあらゆる  
 言語要素を、自由自在に、好みのままにあや  
 つることができた。こうした態度が、ラテン  
 語にわけられて、ほとんどカリカチュアにま  
 で達したのが、15世紀末に登場するマカロネ  
 ア派の混合詩体である。そこでは、俗語とラ  
 テン語とが、ほとんど見わけのつかないまで  
 に、文章内で、さらには単語内で、まぜこぜ

(1) テ・カンテス『イタリア文学史』Ⅱ、現代思潮社、p.304.

にされ、言語の謝肉祭とも言える文体が、こ  
 しらえあげられる。そこにあるのは、「世界  
 の一切を戯画化しようとする試み」<sup>(1)</sup>なのであ  
 る。

ここまでの論述は、16世紀にく言語問題>  
 が出現するまでの歴史的背景をなす。<言語  
 問題>が、どのような意味をもっていたかは、  
 これまで述べた背景を見きわめたなら、より  
 明確に理解できるだろう。それは、ラテン語

と俗語との対抗関係が、しだいにしりぞいて  
 いくなかで、俗語に意識的に統一的規範をあ  
 たえることが、〈問題的なもの〉となつた時  
 点で、生まれるべくして、生まれたものなの  
 である。

第二章 16世紀の〈言語問題〉

15世紀ルネサンスの中心地であつたフィレ  
 ンツェは、世紀末にあいついで起こつた、シ  
 ャルル八世ひきいるフランス軍のイタリア侵  
 攻、メディチ家の追放、サヴォナローラによ  
 る神権政治とその挫折などのできごとを経過  
 するにしたがい、政治的にも、文化的にも、  
 衰退の道をたどることになる。16世紀初頭に  
 〈言語問題〉がわきおこるきっかけとなつた

のは、このようにして、フィレンツェが、そ  
 のヘゲモニーを、いちじるしく弱化させてい  
 ったことがある。フィレンツェは、ほかの都  
 市に文化の形式をあたえるちからを、もはや  
 もってはいなかった。15世紀には、それが排  
 他的規範ではなかったにせよ、フィレンツェ  
 文学の形式性は、暗黙のうちに、受け入れら  
 れてきたのだが、この時期には、フィレンツ  
 ェ・モデルは、それについて語らなくてもす  
 むような対象ではなくなってきた。弁護にせ

よ、論難にせよ、なにかについて意識的に語  
 らなくてはならぬ状況は、それが自明の価値  
 として受け入れられなくなったことをしめす。  
 これにくわえて、フィレンツェ文学が、イタ  
 リア全土に浸透したことは、ダンテ、ペトラ  
 ルカ、ボッカッチョの〈三冠〉が、もはやフ  
 イレンツェだけに属する伝統ではなく、フィ  
 レンツェ語を話さないほかの都市にとっても  
 正当な文学伝統となるような状況をつくりだ  
 したのである。〈三冠〉を称揚することは、

フィレンツェのみの特権ではなくなっていた。  
 さらに、フランス、ドイツ、スペイン各国  
 がいりみだぬての、イタリアへの干渉、侵攻  
 は、各都市国家の独立性を崩壊させただけで  
 なく、知識人だけのものではあつたにせよ、ユ  
 マニスムにもとづく文化的統一性を、こなご  
 なにふきとばしてしまった。〈言語問題〉と  
 は、こうした政治的危機の状況にあつて、文  
 化的統一性の再建、修復の意志が、言語につ  
 いて語る言説のすがたで、あらわれたものだ

と言つてもよいのである。もちろん、その意  
 志が、客観的現実にたいしてとる距離は、さ  
 まざまであるのだが。  
 それでは、〈言語問題〉とは、具体的には  
 どのようなものであつたのか。前章でみたよ  
 うに、俗語は、ラテン語との敵対関係にある  
 ことをやめ、十分な自立性をもつことばであ  
 ることがみとめられた一方で、そこにはなん  
 ら統一規範が存在せず、むしろ、はなはだ  
 しい混質状態をさえ呈していた。そこで、俗

語にたいして規範を設定するとすれば、地理的、歴史的、社会的、文体的座標軸のそれぞれどこに規準点を見いだすべきかという問いが、**〈言語問題〉**という論争の枠組をかたちづくる。てみじかに言えば、そこには、つぎの三つの立場がある。

1. 1300年代のトスカナ文学語に、俗語のゆいいつの規範をもとめる**純粹主義**(*purismo*)。

2. 法王庁または各地の宮廷にひるまって

いるコイナーとしての宮廷語(*lingua cortigiana*)支持者。あるいは、イタリア各地の言語の要素をとりいれた**共通イタリア語**(*lingua italiana comune*)支持者。

3. 現在のフィレンツェ口語慣用が、俗語の規範をつくとみなす**フィレンツェ主義**(*fiorentinismo*)。

そして、**〈言語問題〉**を複雑なものにして  
いるのは、この論争が、現在から未来へむけての規範のありかたに決着をつけようとした

だけでなく、すでに時間的厚みをもなえた。  
 俗語とその文学伝統とにかんする歴史的解釈  
 の問題をふくんでいることである。とくに、  
 ダンテ、ペトラルカ、ボツカツチヨのく三冠  
 にたいして、どう対応するかが、これらの立  
 場の決定的わかめになる。だから、く言語  
 問題は、俗語伝統の歴史的定式化をめぐる  
 論争でもあったわけである。たしかに、ある  
 思想的立場に正当性を付与するには、歴史を  
 ひきあいにだすのが、もっとも効果的な手段

であるということは、一般的に言えるかもし  
 れないが、く言語問題においては、俗語の  
 歴史的様相について語ることは、そのまま、  
 立場の表明になってしまふというところに、  
 特異な点がある。  
 ともあれ、く言語問題とはいかなるもの  
 かを、具体的に明らかにするために、上の  
 べた三つの立場のそれぞれについて、論じて  
 いく。



1. ピエトロ・ベンボ

— 1300年代への回帰

15世紀末のヴェネツィアは、その出版活動において、ヨーロッパのなかで、最大の規模を誇っていた。そのなかで注目すべきは、アルド・マヌーツィオの活動である。マヌーツィオは、ビザンチン帝国崩壊後、ヴェネツィアに亡命してきたギリシャ人学者の協力をもち、ギリシャ語哲学、文学の古典作品を、

ぞくぞくと刊行しはじめる。そして、かれのまわりには、出版物の選択と原典校訂のため、ヘレニストを主とした知識人たちが、あつまりようになる。そのなかのひとりに、ピエトロ・ベンボがいた。マヌーツィオは、それら知識人たちの助言をおおぎながら、さらに出版分野をひろげ、手軽なハフ折版によって、ラテン語の著作、さらには、俗語文学作品を、刊行しはじめるのである。そのなかには、ベンボの校訂による『カンツォニエーレ』

(1501)、『神曲』(1502)、そして、ベンボ自身の著作『アージロのむとびと』(1505)があった。

安価で大量の部数の出版を可能にし、広範な読者層の形成をうながすと同時に要求した活版印刷術の発展が、俗語の社会的機能の拡大にはたした役割は、きわめて重要なものがあるのだが、それよりも、ここでは、ダンテやペトラルカなどの俗語古典作品だけでなく、まさに同時代の俗語文学にまで、出版の対象

がひろげられたことに、注目したい。ある意味では、ここではじめて、俗語は、ギリシャ語やラテン語におとらないく書物のことば>になったのである。

ともあれ、ユマニスト的教養を身につけ、ラテン語でも多くの作品を書いたベンボは、こうして、俗語の領域において、作家活動と文献学的活動を、平行しておしすすめていった。イタリアの<言語問題>の根の深さは、文学者が作品に手をそめるまえに、どのよう

な言語と文体で書くべきかという、個人的な  
 く言語問題>を意識的に解決しなければなら  
 ないところによくあらわれているが、ベンボ  
 が、『アーゾロのひとびと』を、ボッカッチ  
 ョ的文体でつづったときに、すでにかれの言  
 語観は、ある程度、かたまっていたのかもし  
 れない。しかし、それが明確に表明されるの  
 は、やはり、『俗語について (Prose della volgar  
 lingua)』(1525、ヴェネツィア刊)を待たね  
 ばならない(ただし、そのうち第一書、第二

(1) 用いたテキストは、Pietro Bembo, Prose della volgar lingua, a cura di Mario Marti, Padova, 1967

書とも、1512年にはできあがっていた)。  
 ベンボの『俗語について』<sup>(1)</sup>は、当時よく用  
 いられた趣向として、実在の人物を登場させ  
 ある主題について議論をかわさせるという、  
 対話篇の作品である。ここでは、ベンボの言  
 語観が、もっともよくあらわれている。第一  
 書だけに焦点をしぼることにする。  
 登場人物は、ジュリアーノ・デ・メディチ  
 フェデリゴ・フレゴージ、エルコレ・ストロ  
 ッツァ、カルロ・ベンボ(ピエトロの実弟)

の四人であるが、対話は、ラテン語支持者エルコシと、俗語支持者ジュリアーノ、カルロとのあいだでかわされる、ラテン語と俗語との優劣の比較についての議論で、幕をあける。エルコシがまず口火をきり、なぜ世間では俗語をほめそやし、俗語で書くべきだと言われているのか、その理由がわからないと言いつくくにカルロにむかって、あなたの兄のピエトロ（作者自身のことだ）は、ラテン語に精通していながら、なぜ俗語で書くのか、と問

(1) Bembo. op. cit., p. 7

いかける。これは、ベンボ自身、いちどは答<sup>(1)</sup>えねばならない問いであつたはずだ。これにたいして、作者ピエトロの代弁者ともいえるカルロは、こう答える。習得するのに多くの時間と労苦が必要であるラテン語は、けっきよく、われわれからは遠いことばであるが、「われわれはみな俗語で一生をすごす」のであるから、俗語はずっとみぢかなことばである。ローマ人にとってのラテン語が、われわれにとっての俗語である。「ラテン語は、ゆ

(1) ibid. p. 8~9.

(2) ibid. p. 9.

りかごのなかで乳母から教わるのではなく、

学校で教師から、それも、すべてのものでな

く、ほんの少数の者が、教わるのであり、ひ

とたび賞えたとしても、いつも使うわけでは

なく、たまにしか、ときにはまったく、使わ

ないのである<sup>(1)</sup>

そして、ジュリアーノは、これを要約する

かのように、俗語は「生まれながら自分自身

のもの (nata e propria)」であるが、ラテン語

は「外来のもの (straniera)」であると言う。

(2)

(1) ibid. p. 9-10.

だが、エルコレは、自説を曲がず、俗語が

われわれに近いことばであることは認めつつ

も、言語の「尊厳 (dignità)」と「名声 (stima)」

という概念をもちだし、ラテン語は、遠いこ

とばであるからこそ、文学的に洗練され、規

則をもった、尊ぶべきことばであるが、俗語

は文学には無縁のことばだと決めつける。こ

れにたいし、ジュリアーノは猛反撃をおこな

い、それなら、ローマ人は、ギリシャ語をま

えにして、ラテン語で書くべきではなかつた

u) *ibid.* p. 10-12.

のか、あらゆる圍のひとびとが、逸脱をおかして、  
 していることになりはしないか、そうではな  
 く、書くのに用いるべきなのは、尊ぶべき(  
*degne*) ことばではなく、自分自身の (*proprie*)  
 ことばなのであり、キケロも、ダンテもそう  
 したのだ、と答えるのである。

(1)

こうして、俗語で書くことの正当性が、は  
 っきりとしめされたわけだが、この議論は、  
 『俗語について』の主題 — 俗語の規範はど  
 うあるべきか — にはいるための導入部の役

割をはたすという以上の意味はもたない。あ  
 る意味で、エルコレは、論議されるために登  
 場する、ラテン語支持者のカリカチュアなの  
 である。俗語に議論を集中するために、ラテ  
 ン語は、言説のなかで、視野から遠ざけねば  
 ならなかったのだ。言わば、ベンボは、ラテ  
 ン語にたいする俗語の優位を証明すること、  
 というテーマがあたえられたうえで、課題作  
 文をついたのである。ここにあるのは、あ  
 らかじめ設定された論拠群の組みあわせであ

る。なぜ、そうなのかというところ、ここで、俗語を支持するために用いられた論拠は、のちに、俗語の規範をさだめるときになると、はっきり否定されることになるからだ。けれども、これは、ベンボがここで心にもないことを言っているという意味ではない。

ともあれ、こうして俗語の価値が認定されたのちに、おもにフェデリゴが、俗語の起源からプロヴァンス詩、シチリア派をへて、1300年代のトスカナ文学にいたる、俗語の歴史

をあとづけていくのだが、ここでは深入りしないでおこう。ただ、俗語の起源はローマの民衆語にあるというブルーニ説は、はっきり否定されること、そして、ベンボの言語へのまなざしは、文学言語の形式性、修辞性のみにはむけられることを指摘しておく。とくに、後者の点は、ベンボの言語観の本質をかたづけくるものになるのである。

だが、ここで、ふたたびエルコレが論点をさしだす。ラテン語は、どの土地にあっても

1) ibid. p. 27-28.

おなじ規則と形式にしたがう、ひとつのこと  
 ばであるが、俗語は、それが話される地方に  
 よって、さまざまなすがたをとるのだから、  
 俗語で書くとしたら、いったい、そのうちの  
 どれを採るべきなのか、と問いかけるのであ  
 る。ラテン語の単一性に対する俗語の多様性  
 (1)  
 というこの問題は、すでに、ダンテも頭をな  
 やませたものであったが、多様な俗語のなか  
 に、どのようにして統一性を見いだすかが、  
 く言語問題のたえずかわらぬ主題となるの

である。この問題は、理論では解決できず、  
 実践のなかで、問題自体を解消してしまうい  
 がいには、手だてはないのだが、これが理論的  
 言説のたえまない対象となったところに、イ  
 タリアのく言語問題の特異性がある。  
 うえのエルエシの問いにこたえるべく、ま  
 ず提出されるのが、『俗語の詩について』と  
 いう著作でカルメタが称揚した「宮廷語(lin-  
 gua cortigiana)」である。これについて、カル  
 ロは、つぎのように自説を展開する。宮廷語



といっても、それは、イタリアの各地や、さら  
 くに外国にちらばる数多くの宮廷で話される  
 ことばのことではなく、ローマの宮廷、法王  
 庁で話されることばのことだ。ローマには、  
 イタリアの各地方の者だけでなく、多くの外  
 国人も滞在しているのであるから、「法王庁  
 で用いられているのは、スペイン語、フラン  
 ス語、ミラノ語、ナポリ語などのどぬかひと  
 つではなく、<sup>これら</sup>あらゆることばの混じりあいか  
 ら生まれ、いまや、法王庁のひとびとのあい

(1) *ibid.* p. 29

だでだれにでもひとしなみに共通であること  
 ばである<sup>(1)</sup>それはちょうど、ギリシャにおい  
 て、四つの方言の混淆から生まれたコイネー  
 のようなものであるが、ことなる点は、宮廷  
 語というものは、けっして、一定の形式も規  
 則もそなえていないことにある。宮廷を構成  
 するひとびとが、うつりかわるにつれて、宮  
 廷語も、それにつれてすがたを変えてしまっ  
 たらう。したがって、宮廷語を俗語の規範に  
 するのは、ふさわしくない、とカルロは最終

判断をください。こうして、俗語支持者のなかで、まず、く宮廷語フに規範をもとめる者の立場が、しりぞけられたわけである。

く宮廷語フを仮想敵とすることで、あきらかにになったのは、ベンボにとって、言語規範は、けっして、変動性、混質性を内にふくんでいてはならないということである。つまり、規範は、不変で、同質的でなくてはならないということだ。しかし、それだけでは足りない。ベンボがのぞむ言語規範のもっとも重要

な属性は、文学性なのである。

まさにここから、ベンボの言語観の全面的な展開がはじまる。ジュリアーノの口をかりて、ベンボは、宮廷語というものは、ほんとうの意味での言語(lingua)ではないと言うのである。「行きあたりばったりのはなしやおしゃべりは、言語ではない(questo ragionare per avventura e questo favellare tuttavia non è lingua)。なぜなら、作家をもっていないようなことは(favella)は、ほんとうの意味での言語(lingua)とは言え

- (1) ibid. p. 31.
- (2) ibid. p. 32.

ないからだが、<sup>(1)</sup> それぞれ言語は、何らかの性質をそなえているのだが、その性質は、その言語で作品を書いた者によってのみ、表わされる。フィレンツェ語が、プロヴァンス語よりも、規則的で (regolata)、優美で (vaga)、純粹である (pura) と言えるのは、ひとえに、ペトルカとボッカッチョのおかげなのである。<sup>(2)</sup> つまり、ベンボのいうく言語とは、あくまで、作家によって形式性、美的性質をあたえられた文学言語のことであるわけだ。

だから、ベンボが理想とする俗語は、文学伝統にささえられたトスカナ語であって、けっして、それいがないのものではない。ベンボ自身が、なぜ、『アーゾロのひとびと』を、ヴェネツィア語でではなく、トスカナ語で書いたのかという理由が、第カルロの口をかりて説明されるところでは、言語に肯定的価値を付与しうるような形容辞が、総動員されてトスカナ語の優秀性が称賛される。トスカナ語は、<sup>Y</sup> ヴェネツィア語よりも、優美で (gentile)、

(1) ibid. p. 33

甘美で (dolce)、優しく (vago)、なめろかで (ispe-  
 dito)、生き生きし (vivo)、その単語は、はじめ  
 は清浄 (proprio)、なかほどは整い (ordinato)、末尾  
 は繊細で (delicato)、より文法的規則にしたがい  
 (alle regole hanno più riguardo)、同時に、多くの心  
 地よく甘美な文飾 (molte grate e dolci figure) に満  
 ちている。ということだ。言語の優劣を比較  
 するとき、<sup>(1)</sup> もっともちからを発揮するのは、  
 このような有無を言わさぬ形容辞の積みかさ  
 ねであるが、それは、こうした形容辞が、も

ともと、肯定的価値評価を内にふくんでいる  
 ため、直説法による述語判断をとおして、主  
 観的な評価づけと主張を語ることもできるか  
 らである。そして、ここで用いられる形容辞  
 の選択を見れば、ベンボの価値判断が、ある  
 種の古典主義的美意識にもとづいていること  
 がわかる。  
 だが、ベンボが、ヴェネツィア語をより務  
 ったものとみなす最大の理由は、ヴェネツィ  
 アには、トスカナのような文学伝統が存在し

ないことにあった。ベンボによれば、すぐれた作家が欠けているため、ヴェネツィア語は作品を書くための満足な手段となりえない（*nello scrivere la lingua non soddisfa*）のであるが、トスカナ語は、多くのすぐれた作家の努力によって、あらゆる表現が可能な豊かさ（*copiosa e ampiezza*）とひろがり（*copiosa e ampiezza*）をそなえているのである。けっきょく、ベンボの結論はこうだ。「言語は、輝やかしく尊ぶべき作家をもてばもつほど、美しくすぐれたものになるのだから、フ

(1) *ibid.* p. 34

イレンツェ語は、……わたしの俗語〔ヴェネツィア語〕のみならず、われわれが知っているかぎりのほかのあらゆる俗語より、はるかに卓越している。はっきり言うことができ

る<sup>(1)</sup>

注意すべきは、ここですりぞけられるの、ベンボ自身が生まれ育った地、ヴェネツィアのことばであることだ。ベンボは、自分自身にもっとも身近なことば、「わたしの俗語」にむけて、批判の矢をはなっているの

だ。ここには、トスカナ文学への憧憬がすぎるあまり、生地ヴェネツィアへの近親憎悪の念が生まれたのだと言っただけでは、すまされないものがある。なぜなら、この点は、ベンボの言語観の根本にかかわるからだ。どういふことかと言うと、ベンボの理想とする言語は、卑近な日常的現実から完全に断絶し、永遠の美的価値を体现する文学のなかにおいてのみ、成立するものなのである。ベンボが卓越性をみとめるトスカナ語とは、ペトラル

カとボッカッチョに代表される、1300年代の文学語のことなのであり、同時代に話されているトスカナ語の慣用とは、なんのかわりもない。だから、言語の純粹領域に到達するためには、ヴェネツィア人がヴェネツィア語を遠ざけねばならないのみならず、じつは、トスカナ人でさえ、身のまわりで話されているトスカナ語を遠ざけねばならないのである。ベンボは、トスカナ人はトスカナ語を「なんの苦勞もなく、ゆりかごと産着のなかで覚

える」一方、非トスカナ人はそれを「努力に  
 努力をかさねて作家から学びとる」と言う。  
 しかし、ベンボによれば、まさにこの点で、  
 非トスカナ人はトスカナ人よりも有利な位置  
 にたっているのである。なぜなら、トスカナ  
 人は、日常生活でトスカナ語を用い、たえず  
 まわりでトスカナ語が話されているので、も  
 のを書くときにも、知らず知らずのうちに、  
 「庶民の慣用 (popolare uso)」にしたがって、不  
 純な要素をまぎれこませてしまうのだが、こ

(1) *ibid.* p. 35

れは、「すぐれた著述だけから [トスカナの]  
 言語を学ぶ」非トスカナ人には、起こりえな  
 いことだからである。つまり、ベンボが理想  
 とかけざるトスカナ語は、生活のなかで自然  
 に身につけ、社会のなかでく慣用<sup>(1)</sup>フとなつて  
 いることは<sup>2</sup>ではなく、1300年代の作家のく書  
 物<sup>3</sup>にもとづき、てまひまかけて学習すべき  
 ことばである。そして、非トスカナ人が、ト  
 スカナ語にたいしてとっている距離は、まさ  
 しく、書きことば<sup>4</sup>が話しことば<sup>5</sup>にたいして必

然的にとらなくてはならない距離に、ちょうど適合しているのである。この主張は、同時代のフィレンツェ語慣用を、俗語の規範にしようとした、フィレンツェ主義と、真向うから衝突することとなるだろう。

注目すべきは、まえに俗語とラテン語との対抗関係のなかで示された価値判断が、ここで、完全に逆転してしまっていることだ。学校で少数者が学ぶラテン語にたいして、俗語は、すべての者が乳母から習う生まれながら

のことばであるからこそ、その正当性を堅持しえたのではなかったか。ところが、いまや現実の話しことばに汚染されず、書物のなかのみ存在し、多大な努力をはらって始めて習得できるトスカナ文学語こそが、俗語の規範となるべきだといっているのである。けっきょく、ベンボは、ラテン語と俗語とのあいだにあつた価値の階層秩序をそのままにしておいて、ラテン語がかって占めていた地位に、1300年代のトスカナ文学語をつかせようともく



るんだのである。言語に価値をあたえる古典  
 主義的秩序は、微動だにせず、たかだかそれ  
 が、俗語にまで拡張されたにすぎない。この  
 点で、ベンボは、古典ラテン語を支持するユ  
 マニストと同じくらい、復古主義的態度をと  
 る。じじつ、ベンボは、ラテン語で書くとき  
 にも、ひたすらキケロの言語に従順であるう  
 と努めたのだが、ちようど、ラテン語におけ  
 るウェルキリウスとキケロが、俗語における  
 ペトラルカとボツカッテヨになるわけだ。そ

れは、ベンボがゆいいつ信じる。言語の永遠  
 の美的価値を体現するく古典>なのである。  
 対話でここまでくると、同じく俗語を支持  
 するといっても、ジュリアーノとカルコは、  
 対立する立場をとることになる。ジュリアー  
 ノは、のちにふれるカステイリオーネを思わ  
 せる観点から、言語はひとたびも同じ状態に  
 はなく、たえまなく移りかわるものだから、  
 ほかの社会の慣習とおなじように、書くとき  
 には、いま生きている人々にわかるように。

(1) *ibid.* p. 36-37.

「時代の慣用につきしたがう」ことが、ひつ  
 ようであると言う。そして、もし、ペトラル  
 カとボツカッチョの用いたことばだけが、許  
 されるとするなら、われわれは、生きている  
 者にではなく、死者にむかって書いているこ  
 とになるのではないか、とカル口にむかって  
 問いかける。  
 (1)  
 これにたいするカル口の答えは、著者ベン  
 ボの言語観、文学観を、あますところなく、  
 えがきだしている。カル口は言う。もし作家

が、うつりかわる言語の慣用にしたがうべき  
 だとするなら、文飾に富み (*figurata*) 優美な (*gentile*) ことばで書く者よりも、庶民におわせ  
 て (*popolarescamente*) 書く者のほうが称賛され、ウ  
 エルギリウスよりも、「広場と俗衆の講釈師」  
 のほうが、価値のあることになってしまう。  
 「書くときの言語は、民衆 (*popolo*) の言語にち  
 かづいてはならないのであり、ちかづくにし  
 ても、重々しさ (*gravità*) を失わず、偉大さ (*grandezza*) を失わないかぎりのことである。」作  
 (傍点引用者)

(1) ibid. p. 38.

家は、いま生きている人々に向けて書くだけでなく、未来の人々にもに向けて書くべきであり、あらゆる時代と場所を超越した、永遠の価値を作品にあたえるべきである。ペトラルカも、ボッカッチョも、民衆のことば<sup>(1)</sup>にあわせて書いたわけではない。「ある時代の作品に、名声と権威をあたえるのは、多数者ではなく、それぞれの時代のほんの少数の者である」すぐれた作品は、まず少数の知者(dotti)に評価され、世間の人々(genti)は、知者の判

(1) ibid. p. 40

(2) ibid. p. 41

断につきしたがうものである。そして、「いま生きている者が、話し書いていることば<sup>(1)</sup>よりも、過去の人間の作品のことば<sup>(2)</sup>のほうが、よりすぐれていて、より称讃される」のであるから、「われわれにしても、過去の時代の文体で書かななくてはならない」のである。<sup>(2)</sup>第一書のおわりでは、エルコレが、新旧トスカナ語の混用ではどうか、と言うが、カルロは、最良のものには、なにものも混ぜてはならないという理由から、この提案を拒否す

(1) ibid. p. 44

るのである。

(1)

つけくわえておくなり、ベンボは、ダンテを、ペトラルカほど評価していない。おそらく、目のまえの現実からはなれて、永遠の美的調和の理想郷をえがくことに、文学の任務

を見たベンボには、ときに呪詛や嘲笑にまで達するほどの、峻厳なりリズムをもって、矛盾にみちた現実のあらゆる局面を包括しようとした『神曲』の<sup>複合的</sup>宇宙よりも、ほのかにゆれうごく感情と、失われた過去への追憶を、

清浄にうたう『カンツォニエーレ』の単調性の小世界のほうが、好みにあつたのであろう(このことは、内容のみならず、これらふたつの作品の言語的形式についても、言えることである)。

ベンボが理想とする言語は、文学的修練をつんだ少数の知識人だけが受容しうるようなことばである。これは、一種の言語的カーブトをつくりだそうとするところみであり、俗語の内部において、書きことばと話しことば

との二層言語状態を、意識的に構築しようとするくわだてであった。そして、書きことばといっても、ベンボが視野におさめているのは、パトラルカを範とおおぐ抒情詩と、ボツカッチョを範とおおぐ物語の分野だけであって、そこには、実用散文のみならず、他の文学ジャンルさえも、ふくまれてはいない。だから、ベンボが、上で述べたような純粹主義 (purismo) の教義をうちたて、それが強い影響力をもった16世紀なかばから、ぎゃくに、方

言文学が治況を呈することになるのは、おどろくにあたらなない (典型的なのは、コンメデア・デッラルテ [民衆仮面劇] である)。ベンボの純粹主義は、古典主義的文学観をもった者のみ課せられる価値であり、その外部にたいしては、ほとんど強制力をもたない。精神的貴族世界のなかで、純粹の美的機能しかもたない言語形式の確立が、そこでは、めざされたからである。

こうして、ひとたびはしりをけられたかに

見えたラテン語のモデル、歴史的時間による  
 腐蝕もこうむらない不変の規範言語の価値は、  
 1300年代のトスカナ文学語にすがたをかえて  
 もどってくる。ベンボは、ユマニストたちが  
 古典ラテン語作家にたいしてとったく模倣（  
 imitazione）の態度を、そのまま俗語の圏内で  
 ペトラルカとボツカッチョにたいして、とっ  
 たからである。つまり、古典ラテン語を対象  
 としていたユマニズム的原理を、俗語の領域  
 にも適用することが、ベンボの目的であった。

たしかに、ユマニズムの理論的言説のなかで  
 は、このく模倣の原理は、過去の他者と対  
 話をかめすことで自己を察見し、古典作家の  
 なした創造過程をかがみとして、みずからの  
 創造にのりだす道をさししめすものとして理  
 解された。そこでは、く模倣はく創造と同  
 義であった。けれども、それは鋭敏な歴史  
 意識にうらうちされのみ可能であり、それが  
 少しでも欠け、盲目的古典崇拜にいたると、  
 く模倣は、皮相な意味での物まねに転落す

る。理論上はどうあれ、現実には、**〈模倣〉**の原理は、古典作家の口まねしかできない銜学者を輩出させることになる。だから、おなじユマニズムの思想圏にあったエラスムスが、キケロの修辭的で凝った文体をひたすらまねる学者たちを、徹底的に批判し、**〈模倣〉**の原理そのものを、言語と思想から生命力をうばうものとして、否定することにもなるのである。そして、エラスムスが批判のままとした**〈キケロ主義者〉**のなかには、ベンボその

- (1) **〈模倣〉**の概念については、Garin, Eugenio, *Umanesimo e rinascimento*, in *Questione e correnti di storia letteraria t. III.*, Milano, 1975, p. 371-377. Garin, Eugenio, *Educazione in Europa 1400/1600*, 1957, 1976, Bari, p. 99-105. (邦訳『ヨーロッパの教育』サトル出版, p. 109-116) エラスムスの批判とは、Ciceronianus (1528)をさす。
- (2) Gensini, Stefano, *Lingua e dialetti nella cultura italiana da Dante a Gramsci*, Firenze, 1980, p. 37

人がふくまれていた。

(1)

プラトニズム的世界観にもとづき、純粹言語の永遠世界を夢みるベンボにあっては、**〈模倣〉**の原理は、過去の理想言語の延命作業に従事する概念にほかならなかつた。ジェンジニが指摘するように、1300年代のトスカナ文学語のみが、言語の純粹性をそなえていたという教義は、文体的神話であっただけでなく、イデオロギー的なものでもあった。それは、崩壊しつつあったユマニズムの統一世

(2)

界を、俗語の領域で再生させようとした。知識人の立場決定を表わしているのである。ここにおいて始めて、ペトラルカとボッカッチョは、古典作家となる。両者とも、これまで、ほんとうの意味での古典のあつかいをうけたことがなかった。古典とは、もっともよく読まれる作品のことではない。註釈がさずけられ、その意味を解釈すること自体が、ある価値をもった文化的活動とみなされ、さらに、新たに作品を書くときに

は、形式においても、内容においても、模倣しなければならないとされる作品のことである。古典の概念は、模倣の概念と不可分に結びついているのであり、古典作家 *Autore* とは、文化の再生産モデルをあたえる権威 *autorità* なのである。ベンボの言語純粹主義 (*purismo*) は、ユマニズムの原理にもとづいて、俗語のなかにそうした権威をうちたて、文学言語の統一規範を設定しようとするものであるが、それは、過去



の文化伝統の遺産保持者であることだけが、  
みずからの同一性のあかしとなった知識人に  
存在証明をあたえてくれる教義だったのであ  
る。

ひとつ注意すべきことがある。ベンボは、  
ラテン語のありかたに、言語規範のモデルを  
見いだしたのであって、ラテン語の語彙を俗  
語のなかに導入することには、反対したとい  
うことである。この点では、たしかに、ベン

(1) Dionisotti, Carlo, Geografia e storia della letteratura italiana,  
Torino, 1967, 1971, p. 168-169

ボは、ランデーノの行きかたとは、逆方向  
を向いている。すでに見たように、ランデー  
(1)  
ノは、俗語をく豊かにする<sup>1)</sup>ために、ラテ  
ン語の語彙を俗語のなかに導入し、同化しよ  
うとしたのだが、ベンボにとって、1300年代  
トスカナ語は、すでに十分なく豊かさをも  
っており、他の要素をとりいれる<sup>1)</sup>ひつようは  
まったくないのである。ベンボは、1400年代  
文学にまったく意義をみとめていないのだが、  
それは、統一規範のない混成状態<sup>その時代に</sup>が支配的

だったからであり、ユマニストのラテン語法  
 (latinismi)も、その点では、おなじく不純な要  
 素としてとらえられたのである。ベンボは、  
 ラテン語と俗語をきりはなしたうえで、俗語  
 に、ラテン語と同様の文法と修辞学の規則を  
 あてがうことで、俗語の独自性を確立しよう  
 としたのである。その意味では、対話の導入  
 部にあっただように、ラテン語にたいして俗語  
 が優位にあることを、いちどは言っておかぬ  
 ばならなかったとも言えよう。ともあれ、言

語純粹主義は、原則的には、過去のく金の時  
 代への言語規範に登録されている語彙<sup>とそれが表わす意味</sup>だけを  
 認めるのであるから、外国語からの借用、造  
 語、さらに、比喻などによる意味拡張などを  
 すべて拒否する。しかし、このような態度を  
 どこまで維持できるかは、実際には、疑わし  
 いのだから、純粹主義の歴史は、自己欺瞞か  
 あるいは、妥協工作の歴史にならざるをえな  
 いのである。

ベンボは、1512年に『俗語について』第一書、第二書を書きおえると、新法王レオ10世の秘書に招かれ、1520年までその職にとどまることになる。このメディチ家出身の法王のもと、ローマには、数多くの知識人、芸術家が集まり、フィレンツェ衰退後の後期ルネサンス文化の中心をかたちづくる。ベンボが、このように高い社会的地位にあつたことから、その言語教義は、かなりの影響力をもつた。その著しい例として、アリオストへの影

(1) Una lingua per tutti: l'Italiano, vol. 1. Lingua e storia, a cura di Raffaele Simone, Torino, 1980, p. 177

響があげられる。  
トスカナに生まれ育たなかったフェラーラ人、アリオストは、『狂気のオルランド』(第一版1516年、第二版1521年)を、1525年に出版された『俗語について』の教義にもとづいて、言語的に修正をくわえ、1532年に純正トスカナ語による決定版を刊行する。そして、そこには、「みずからの手本によつて……われわれの純粹で甘美なことば」を示したピエトロ・ベンボ」への称讃の詩行さえつけくわえ

(1) Stussi, Alfred, *Lingua, dialetto e letteratura*, in *Storia d'Italia*, vol. 1. I caratteri originali, Torino, 1972. p. 698.

られるのである。 <言語問題>とからまりあ  
ったイタリア文学においては、ある言語教義  
にしたがって、作品を書きかえるのは、けっ  
してめずらしいことではない。

さらに、ベンボの教義は、そのころから現  
われはじめの文学語彙集や押韻辞典に、一定  
の方向づけをあたえた。そこでは、1300年代  
<sup>(1)</sup>  
のトスカナ文学語と、それに忠実な1500年代  
の作家のものだけが、対象となる。この延長  
線上に、言語の <權威> の保管所としての、

クルスカ・アカデミーが成立することになる  
のである。